

NATIONAL NOTO YOUTH FRIENDSHIP CENETR



 National Noto Youth Friendship Center
国立能登青少年交流の家



〒925-8530 石川県羽咋市柴垣町14-5-6
TEL : 0767-22-3121 FAX : 0767-22-3125
URL <https://noto.niye.go.jp/>



令和2年度
事業報告書

DO my best!



 National Noto Youth Friendship Center
国立能登青少年交流の家

令和 2 年度
事業報告書

- Do my best! -



独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立能登青少年交流の家

目 次

はじめに	P1
第1章 令和2年度の教育事業について	P2
第2章 教育事業の実際	P5
地域力向上事業	
羽咋まるごと CAMP	P6
親子でのとまり会	P11
指導者養成等養成研修事業	
ボランティア養成事業兼自然体験指導者 (NEAL リーダー) 養成事業	P16
教員免許状更新講習	P18
のともキッズキャンプ	P20
体験活動等普及啓発事業	
NOTO キッズイングリッシュキャンプ	P22
HAKUI キッズイングリッシュキャンプ	P24
ホップ・ステップ・Camp	P28
ヒノビィと一緒に 通学合宿	P30
普及啓発事業	
全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」	
オリエンテーション合宿 in 能登	P32
中部ブロック地方ステージ 地域探究アワード in 能登	P38
地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業	
ファミリーキャンプ	P40
能登オープンデー	P41
プログラミング教室	P42
のと's キッチン	P43
交通アクセス	P44
協賛企業一覧	P45

は じ め に

国立能登青少年交流の家は、豊かな自然環境や人的環境・社会環境に恵まれた羽咋市に立地しております。次代を担う青少年が、自然や人とかかわる多様な活動をとおして、心に残る感動や困難な課題に取り組んでの達成感、仲間との連帯感、他者への思いやり、自己有用感の高まり等の教育的効果を上げるべく様々な事業を展開しております。

教育事業では、青少年の今日的な課題に対応し体験活動を推進するため、地域の教育資源を生かし、地域の教育力を向上させるプログラム開発事業を石川県内の教育機関と連携し実施しました。羽咋市教育委員会との連携による取り組みとしては、昨年度より「HAKUI キッズイングリッシュキャンプ」、「プログラミング教室」を実施しております。新たな取り組みでは、高校生の「総合的な探究の時間」の学習をサポートする全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」を実施し、地域のさまざまな課題に対する高校生の探究活動を支援するとともに、当施設が中部ブロック担当として「地方ステージ」を開催しました。

また、より多くの青少年やその家族、地域の方々が、基本的生活習慣の確立や、様々な体験活動の場や機会の充実を目指した事業を多数実施しました。

さらに、青少年のための様々な体験活動を推進する青少年教育指導者等を対象とし、ボランティアの養成や教員免許状更新講習といった養成・研修事業も実施しております。

なお、令和2年度においては、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、学校単位での宿泊利用が大幅に減少するとともに、これまでの当施設の看板事業ともなっていた、白山登山と能登半島を自転車で縦断する長期キャンプ「ACTIVE」の実施を中止することとなりました。全体として、宿泊利用者数等の量的縮小は避けられませんでした。事業内容の充実に傾注することとし、感染症対策に配慮しながら、短期泊の「羽咋まるごとキャンプ」や個人参加型の「NOTO キッズイングリッシュキャンプ」等を実施し、参加者の評価から高い満足感を得られたものと感じております。

以上のように、各種事業を通じて能登の自然や人材を生かした感動体験を提供することで、青少年の「生きる力」を育んで参りました。そして、多くの事業において、参加者の変容が見られ、青少年の健全育成と指導者の育成に大きく貢献できたかと自負しております。

本報告書は、主だった事業について、ねらい、事業の概要及び成果と課題をまとめたものです。学校関係者、青少年教育及び広く社会教育に携わる方の参考となることを願っております。

最後に、事業の実施にあたり、ご指導いただきました講師の皆様、ご支援・協力をいただいたボランティアの皆様、地域の皆様方に厚く感謝申し上げます。

令和3年3月

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立能登青少年交流の家 所長 佐藤 博之

第 1 章 令和 2 年度の教育事業について

1 令和 2 年度教育事業の概要

令和 2 年度の教育事業の方針については、第 3 期教育振興基本計画等、国の青少年教育行政に関する基本方針を踏まえ、第 3 期中期目標・中期計画を踏まえ推進する。更に「体験の風をおこそう」運動、「早寝早起き朝ごはん」国民運動及び研修支援の充実と利用拡大は機構の重点事項と捉え、教育事業において、体験活動をより一層推進する。

また、「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」の趣旨に十分留意し、様々な関係機関との連携を意識しながら子供の発達段階に応じた体験活動の充実を目指し取り組みを行ってきた。

令和 2 年度 国立能登青少年交流の家 教育事業の柱

1 地域力向上事業

地域力向上事業は、青少年の今日的な課題に対応し体験活動を推進するため、地域の教育資源を生かし、地域の教育力を向上させる事業として実施する。また、施設の特色や立地条件、活動プログラムを活かす。更に、自然体験活動や創作活動に親子で取り組むことが減ってきている課題にも着目し、それぞれのニーズに合わせた事業を展開する。

2 指導者養成等養成研修事業

青少年に良質な体験活動の機会と場を提供するためには、質の高い指導者を養成することが必要不可欠であることから、青少年教育指導者等を対象とする体系的な養成・研修事業を実施し、その資質・能力の向上を図る。

3 体験活動等普及啓発事業

地域に貢献するための特色化に向け「国際理解」をテーマに推進する。社会のグローバル化や情報化の進展が激しい時代である。グローバル人材の育成を図るため、関係機関・団体と連携して「国際理解」の事業を推進する。

4 普及啓発事業

高校生が地域づくりや地域の課題解決などに関する体験活動を通して、問題発見・解決能力を身に付ける。「探究」の手法を用いて学習を深める「全国高校生体験活動顕彰制度『地域探究プログラム』」を地元高等学校と連携し事業を推進する。

5 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業

体験の風をおこそう推進月間を中心に、地域や青少年教育関係機関と十分に連携し、地域が一体となって体験活動を推進する機運を高める。また、地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業の協力団体の充実を図る。

2 令和2年度国立能登青少年交流の家 教育事業一覧

(1) 地域の教育力を高める事業（地域力向上事業）

① 羽咋まるごとCAMP

対象：小学校6年生

期日：8月8日（土）～10日（月・祝）

② 親子でのとまり会

対象：年長児・年中児とその保護者

期日：【第1回】8月30日（日）

【第2回】9月5日（土）～6日（日）

(2) 青少年教育指導者等の養成・研修事業

① ボランティア養成事業兼自然体験指導者（NEALリーダー）養成事業

対象：大学生・一般

期日：9月20日（日）～22日（火・祝）

② 教員免許状更新講習

対象：小・中・高校免許状更新講習対象者

期日：8月19日（水）～21日（金）

③ のともキッズキャンプ

対象：ボランティア、小学校5・6年生

期日：11月21日（土）～23日（月・祝）

(3) 青少年の体験活動等の重要性に係る普及啓発事業

① NOTOキッズイングリッシュキャンプ

対象：【第1回】小学校5・6年生

【第2回】小学校3・4年生

期日：【第1回】8月1日（土）～2日（日）

【第2回】12月5日（土）～6日（日）

② HAKUIキッズイングリッシュキャンプ

対象：石川県羽咋市内の小学校5・6年生

期日：【第1回】9月10日（木）～11日（金）

【第2回】9月14日（月）～15日（火）

【第3回】9月16日（水）～17日（木）

【第4回】9月17日（木）～18日（金）

【第5回】9月29日（火）～30日（水）

③ ホップ・ステップ・Camp

対象：小学校3・4年生

期日：10月24日（土）～25日（日）

④ ヒノビィと一緒に 通学合宿

対象：施設近隣の小学校3～6年生

期日：【第1回】10月26日（月）～28日（水）
【第2回】10月28日（水）～30日（金）
【第3回】11月11日（水）～13日（金）
【第4回】11月16日（月）～18日（水）
【第5回】11月18日（水）～20日（金）
【第6回】12月 2日（水）～ 4日（金）
【第7回】12月 7日（月）～ 9日（水）
【第8回】12月 9日（水）～11日（金）
【第9回】12月16日（水）～18日（金）
【第10回】1月18日（月）～20日（水）

(4) 普及啓発事業

全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」

① オリエンテーション合宿in能登

対象：高校生

期日：6月9日（火）、12日（金）、16日（火）、17日（水）

② 中部ブロック地方ステージ 地域探究アワードin能登

対象：高校生

期日：1月19日（火）

(5) 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業

① ファミリーキャンプ

対象：青少年を含む家族

期日：【第1回】新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

【第2回】 7月11日（土）～12日（日）

【第3回】10月17日（土）～18日（日）

【第4回】11月28日（土）～29日（日）

② 能登オープンデー

対象：家族・グループ

期日：9月26日（土）～27日（日）

③ プログラミング教室

対象：石川県羽咋市内の小学校3～6年生

期日：【初級編】10月 4日（日）

【中級編】12月13日（日）

④ のと's キッチン

対象：家族・グループ

期日：【第1回】12月20日（日）

【第2回】 2月11日（木・祝）

第2章 教育事業の実際



令和2年度教育事業
「羽咋まるごと CAMP ～最高の夏がここから始まる～」

1 趣旨

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実施を予定していた宿泊体験学習が多く各学校で中止となった。このような状況を踏まえ、小学校6年生を対象に、所在地である羽咋市の自然環境や歴史・文化的資源を全面的に活用した宿泊体験活動を提供する。

2 ねらい

羽咋市の自然環境および歴史・文化資源を活用した宿泊体験活動を通して、初めて出会う仲間と共に自然に親しみ、互いに協力し合うことで、よりよい人間関係をつくる力を育む。

3 日程

(1) 期 日 令和2年8月8日(土)～8月10日(月・祝)

(2) 参加者 石川県内 小学校6年生 27名(男子15名 女子12名)

(3) 研修内容

8月8日(土)〈本館泊〉	8月9日(日)〈本館泊〉	8月10日(月・祝)
10:00～ 受付開始	6:00 起床	6:00 起床
10:30～ 開講式	7:00～ 朝食	7:30～ 朝食
アイスブレイク	8:00～ マイスプーン作り	8:30～ SUP体験
12:10～ 昼食	9:00～ 野外炊飯	12:00～ 昼食
13:00～ フォトリグイング※1	(のとししカレー)	13:00～ ふりかえり
15:00～ 自転車調整・練習	13:00～ サイクルグイング※2	14:00～ 閉講式
17:00～ 入浴	17:00～ 入浴	14:30～ 解散
18:00～ 夕食	18:00～ 昼食	
19:00～ サイクルグイング※2	19:30～ キャンプファイア	
20:00～ チームフラッグ作り	21:00～ 就寝	
21:00 就寝		

※1 当初サイクリングを計画していたが、雨天のため、フォトリグイング(館内・敷地内)に変更。

※2 午前が雨天のため、午前と午後の活動を入れ替え、午後にサイクルグイングに変更。

4 成果と課題

(1) 活動プログラムの実際

2泊3日の日程で施設に滞在しながら、羽咋市の魅力(自然、歴史・文化、食)を一体的に、まさに「まるごと」味わうことができるよう、3つの目玉プログラムを設定した。

① サイクルロゲイニング in 羽咋/フォトリゲイニング

サイクルロゲイニング、フォトリゲイニングは、当施設のプログラム開発として取り組んだものである。ロゲイニングとは、地図などを使って、コースに多数設置されたチェックポイントをできるだけ多く、制限時間内にまわり、得られた点数を競う野外スポーツである。サイクルロゲイニングは、移動手段として自転車を使用するものである。

「UF0 のまち羽咋」として観光PRをしている羽咋市内には、各所に自然、歴史・文化的資源が多数ある。これらは観光資源でもあり、教育的価値が高いものもある。「サイクルロゲイニング in 羽咋」は、これらをチェックポイントとして設定し、サイクリングをしながら巡る活動プログラムである。市内に多数配置されたチェックポイントの内、「どこを、どんなルートで、どのような順で周るか」という戦略を考えることが高得点を目指すポイントとなっている。そのため、チームでの作戦タイムも設けている。作戦タイムも含めて、チームでの協力が必要とされることから、観光的な要素だけでなく、仲間づくり・チームビルディングの要素も持ち合わせている。さらに、ロゲイニングのルールとして、カメラを使ってチェックポイントを撮影するため、観光地を巡りながら思い出を作るという楽しみもある。雨天時には、館内・施設周辺をフィールドに、徒歩でチェックポイントを巡るフォトリゲイニングも考案した。

当事業では、6名1組の5班を編成し、各班にはボランティアスタッフを1名配置した。参加者の健康・安全面に配慮しながら活動を行った。



【サイクルロゲイニングマップ（一部）】



【チェックポイント一覧（一部）】



【作戦タイムの様子】



【チェックポイントで撮影】

② のとししカレー作り

「のとしし」とは、羽咋市が6次産業として特産化を進めてきたイノシシの精肉加工品である。能登半島では、爆発的にイノシシが増えており、これまでイノシシがいなかった能登では対策が遅れ、田畑に多くの被害が出ている。従来、捕獲されたイノシシは埋設処分されていた。これを資源をととして、精肉、革細工、肥料等に加工して活用する取組が「のとしし大作戦」である。現在は、合同会社ののとしし団が、イノシシの精肉加工販売を行っている。

この「のとしし大作戦」の取組を知ることは、野生動物と人間の関係について考える教材にもなる。環境教育、食育、総合的な学習の時間等にもつなげることが可能で、教育的価値も高い。

当事業では、羽咋市ならではのご当地食材「のとしし肉」のスライス肉とミンチを利用したカレーライス作り（野外炊飯）を活動プログラムとして取り入れた。素材そのものの純粋な味を楽しんでもらうというねらいから、スライス肉は塩コショウで味付けして焼いたものをカレーの上にトッピングし、ミンチは炒めたものをカレーに入れて煮込むことにした。



【のとししカレー】



【食事の様子】

③ SUP 体験

SUPとは「Stand Up Paddleboard（スタンドアップパドルボード）」の略称である。その名の通り、ボードの上に立ち、パドルを漕いで水面を進んでいく新感覚のアクティビティであり、施設から近い羽咋市柴垣海岸で楽しむことができる。SUPは、安定感のある専用ボードを使うことで簡単に立つことができ、性別や年齢を問わず初心者でも比較的時間をかけずに楽しめることができる。また、全身の体幹やバランス感覚を鍛えられることから、エクササイズとしての効果も期待できる。



【SUP 指導の様子】



【SUP を楽しむ参加者】

指導は、羽咋市柴垣町で SUP による観光活性化や海岸の清掃活動等を行っている市民活動団体「長手島」に協力を依頼した。今回は、参加者を約 10 名 1 組の 3 グループに分け、砂像づくりと組み合わせて、3 グループがローテーションで SUP を体験できるようにした。SUP は、参加者 1 名に対して指導者 1 名が付く形で指導を行った。



【砂像づくりを楽しむ参加者】

さらに、羽咋市で活動しているドローンチーム「羽咋ドローンズ」にも協力を依頼し、ドローンで活動中の様子を空撮した。撮影された映像は You Tube で配信し、参加者へ提供するとともに、関係団体の PR にもつなげたいと考えた。

(2) アンケート結果について

事業評価を目的とし、参加者を対象にアンケートを実施した。

①「羽咋まるごとCAMP」は楽しかったですか。(事業の総合的な満足度)



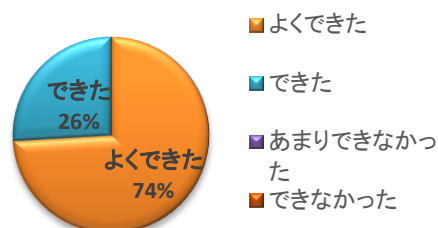
②1日目のアイスブレイクやフットロゲイニングを通してチームワークを仲間づくりができましたか。



③2日目ののとしカレー作りやサイクルロゲイニングを通してチームワークを高めることができましたか。



④3日目のSUP体験をみんなといっしょに楽しむことができましたか。



<参加者の自由記述より（一部抜粋）>

① サイクルロゲイニング・フットロゲイニングについて

- ・サイクルロゲイニングは大変だったけれど、チームワークを高めることができてよかった。フットロゲイニングも協力できた。
- ・羽咋の観光スポットを改めて知り、羽咋市の魅力が伝わっていいと思った。
- ・自分だけじゃなくて、一緒のグループの人たちと力を合わせてできた。

② のとししカレー作りについて

- ・みんなで協力して、自分の役割を果たすことができてよかった。みんなで作ったカレーはとても美味しかった。
- ・グループ全員で頑張って、「協力するのは大切だ」と思った。
- ・のとしし自体を知らなかったから、この事業で知り、食べて美味しいと思った。

③ SUP 体験について

- ・SUP を初めてやって、バランス感覚が大切だった。SUP をたくさんやりたい。
- ・最初は全然立てなかったけど、乗るにつれて立ったり、曲がったり、波に乗れてよかった。
- ・初めてだったけど、教えてくれた人もみんな優しくて、立てた時にうれしかった。

(3) 成果と課題

①成果

- ・事業に対する総合的な満足度は、「とても楽しかった」が 100%となっており、参加者の高い満足度を得ることができた。
- ・サイクルロゲイニング、のとししカレー作り、SUP 体験等の活動プログラムを通して、羽咋の自然や歴史・文化に親しみながら、初めて出会った仲間と共に協力し合いながらキャンプを楽しむことができた。
- ・サイクルロゲイニング/フォトロゲイニングのプログラム開発と当事業での実践により、活動プログラムとしての有用性を確認することができた。
- ・長手島や羽咋ドローンズ、羽咋市との連携および、新聞記事の掲載や You Tube での情報発信により当施設だけでなく、連携団体の PR にもつなげることができた。

②課題

- ・サイクルロゲイニングの地図は、詳細が分かりやすい地図に改良が必要である。
- ・サイクルロゲイニングは、競技性を持たせることで、チームの結束が高まるという利点がある。「チームで競い結束を高めるのか」、「観光を楽しむのか」、どちらを活動の目的として設定するかを選択できるようにするとよい。
- ・のとししカレー作りでは、イノシシによる被害の現状や、捕獲されたイノシシの利活用に関する知識を学べる時間があるとさらによかった。

<連携団体 HP 等参考 URL>

のとしし大作戦 HP http://notoshishi.com/ 	長手島 HP http://nagatejima.hakui.me/ 	SUP 体験動画 (ドローン空撮映像) https://www.youtube.com/watch?v=rZKbRkGVd8M 
---	---	--

令和2年度教育事業 「親子でのとまり会」

1 趣旨

ゆったりとした時間の中で様々な体験を楽しみ、子供にとっては、心と体を働かせ、自信を持って行動し、豊かに思いを伝える機会となる。保護者にとっては、自然体験活動などに取り組む子供の思いを受け取り、成長を感じる機会とする。あわせて、子育てについて学んだり、保護者同士が情報交換を行ったりすることにより、子育てについて考える機会とする。

2 ねらい

自然体験活動や創作活動、生活体験に親子で取り組むことで、子供達の「健康な心と体」、「自立心」、「言葉による豊かな伝え合い」の姿を高める機会とする。ゆったりとした時間の中で様々な体験を楽しみ、子供達の心と体を働かせ、自信を持って行動し、豊かに思いを伝え合う力を育む。



3 日程

(1) 期 日 1回目 令和2年8月30日(日) 日帰り

2回目 令和2年9月5日(土)～9月6日(日) 1泊2日

(2) 参加者 年長児・年中児とその保護者 1回目7家族(18名) 2回目6家族(20名)

(3) 研修内容

<第1回 令和2年8月30日(日)>

9:30	10:00	12:10	13:00	15:00
受付	はじまりの会	<親子> 親子で運動遊び(体育館) 講師 富山福祉短期大学 准教授 小川 耕平氏	昼食	<親子> 森のレストラン (ふれあいの広場)
				おわりの会



<第2回 令和2年9月5日(土)～6日(日)>

1 日目					13:30	14:00	16:00	17:30	18:30	19:30	20:30
	受付	はじまりの会	<子供> 砂像づくり	<親子> テント設置	夕食	<親子> ナイトハイイク	入浴	テント泊			
2 日目	6:30	8:30	9:30	11:30		13:30					
	起床・洗面	朝食	<親子> テント片付け	<親子> 森の洋服づくり	<親子> カートンドッグ作り	子供は保護者のために、 保護者は子どものために 作る	おわりの会				

4 成果と課題

(1) 体験活動の展開とポイント

本事業を通して育みたい力を「健康な心と体」「自立心」「言葉による豊かな伝え合い」の3点とした。3つの力を高めるための活動を設定し、それぞれの力について各活動場面で「のとり会で望む子供達の具体的な姿」の例を設定した。はじまりの会で、保護者と事業のねらいを共有するために、3つの力や「子供達の具体的な姿」について説明し、「子供を伸ばす言葉」を例示した。活動中は、できるだけ見守り、励ましの声かけをしてもらうよう共通理解を図った。また、ボランティアスタッフとも共通理解を図った。

健康な心と体

生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活を作り出すようになる。

自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、あきらめずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

言葉による豊かな伝え合い

大人や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

のとり会で望む子供達の具体的な姿			
場面	健康な心と体	自立心	言葉による豊かな伝え合い
はじまりの会 おけりの会			話を理解しようと聞いている。 感じたり、考えたりしたことをいろんな言葉を使って話している。
親子で 運動遊び	楽しみながら運動をしている。		親子で話し合い、運動遊びをしている。
森の レストラン 砂塚づくり		森の中から材料を見つけ、お弁当を作っている。 自分がイメージするものを作っている。	
テント設置			親子で話し合い、テント設置をしている。
森の 作図づくり		森の中から材料を見つけ、作図を作っている。	
カートン ドッグづくり		パンに野菜やワインナーをはさみ、アルミホイルに包んでいる。	
創作活動共通	・安全に気を付けて活動している。	自分でできることは自分でしている。 できないことは助けを借りてしている。 最後までやり遂げようとしている。	話を理解しようと聞いている。
食事	食事の前に手を洗い、好き嫌いをせずに食べている。	後片付けを自分でしている。	活動について話し合い、伝え合いを楽しんでいる。
お風呂		自分で着替えたり、体を洗ったりしている。	
トイレ		1人でトイレに行く。	

【のとり会で望む子供達の具体的な姿】

ポイント1 親子活動

子供達が安心感を持って活動することができるように、親子で運動遊びや創作活動、テント設置などに取り組む。また、保護者には「子供を伸ばす言葉」を参考に、肯定的な声かけや安心感を与える声かけ、感謝の言葉を伝えてもらう。

ポイント2 振り返り活動

「言葉による豊かな伝え合い」をする場として各プログラムの終了時に振り返り活動を設定する。子供達が、自然体験活動や創作活動で感じたことや考えたことを伝える際の支援として、「気持ちを表す言葉」、「様子を表す言葉」、「考え方を表す言葉」を例示する。子供達がこれらの言葉を自分で選び、感じたことや考えたことを伝えるのは難しい場合には、保護者やスタッフがこれらの言葉を使って問い返すことで、子供達の使用を促す。

親子での振り返り後、全体での振り返りの場面も設定する。活動ごとに繰り返し設定することで、初めは自分の思いを話せない子供も、人間関係に慣れ、他の子が話す姿を見てどのように話せばよいか分かり、勇気を出して話すことができると考えられる。全体の場で自分の

活動中に使ってほしい言葉	
気持ちを表す言葉	
○たのしい ○うれしい ○さわやか ○おちつく ○まんやぐ ○きげんがいい ○きもちがいい ○ゆかい ○まちどおしい ○なつかしい ○きんちょう ○びつくり ○うらやましい ○はんせい ○まよう ○しんぱい ○はらがたつ ○かなしい ○すき ○きらい ○やりたい ○おもしろい ○おちこむ	
様子を表す言葉	
○おおきい ○ちいさい ○あかるい ○くらい ○やわらかい ○かたい ○かんたん ○むずかしい ○おおい ○すくない ○かわいい ○かつこい ○おいしい ○はやい ○おそい ○わいわい ○ボカボカ ○ザーザー ○キラキラ ○チクチク ○つつる ○ざらざら ○さらさら ○ふわふわ	
考え方を表す言葉	
○まるで～のよう ○～とおなじで ○～にていて ○～とちがって ○～とぎやくて	
子供をのばす言葉	
○いいね ○丁寧だね ○やったね ○がんばっているね ○ありがとう ○～ちゃんのおかげ ○勇気を出したね ○あわてなくてもいいよ ○大丈夫だよ ○さすが (結果ではなく、がんばった過程をほめる) (他の子との比較ではなく、その子の成長をほめる) (自分の気持ちを表すイメージで伝える 例：私はうれしい。私は助かる。)	

【活動中に使ってほしい言葉】

思いを話すことにより、自信を持ち、達成感を得ることができる。

ポイント3 評価の工夫

子供達が活動や基本的な生活に関することについて自己評価を行う「がんばったねカード」に取り組む。それぞれの活動後に、子供達が自分自身で振り返り、できたこと、がんばったことを確認してシールを貼っていく。初めはシールを貼ることが目的である子供達も、基本的な生活習慣を身に付け、自分でできることは自分であることを目標として活動に取り組めると考えられる。目標を持って活動し、活動後に自己評価を行い、自分の力でできたことを実感することで、自信が持てたり、達成感を感じたりすることができ、次への活動の意欲にもつながる。保護者にとっても、それぞれの活動での子供達のがんばりや成長について一緒に実感することができる。



(2) 調査結果・考察

①保護者の見取り

事業前、1回目事業後、2回目事業後、事業終了1か月後にアンケート（5段階評価）と自由記述によって保護者により子供の変容の見取りを行った。のとまり会の1・2回目両方に参加した保護者を分析対象とした。

ア 自作アンケート

実施時期：①事業前、②1回目事業後、③2回目事業後、④事業終了1か月後
5…よくできる 4…わりとできる 3…どちらとも言えない
2…あまりできない 1…できない

	観点	質問項目	質問項目別平均値				観点別平均値			
			①	②	③	④	①	②	③	④
1	健康な心と体	いろいろな活動や遊びにおいて、自分なりの目標をもって取り組もうとする。	3.2	3.6	4.0	4.0	3.5	3.7	4.0	3.8
2		いろいろな活動や遊びにおいて、見通しをもって進んで取り組もうとする。	3.2	3.4	4.0	3.8				
3		体を動かすことの気持ち良さを味わったり、場面に応じて体の動きを調整したりすることができる。	3.8	4.0	4.0	4.0				
4		いろいろな活動や遊びにおいて、安全な行動の仕方が分かり、安全な行動をとっている。	3.6	3.6	4.0	3.4				
5	自立心	着替えや歯磨き、入浴など、身の回りのことで、自分でしなければならないことが分かり、自分で行おうとする。	3.8	4.2	4.4	3.8	3.3	3.9	4.0	3.7
6		自分でできないことは助けを借りて行おうとする。	3.8	3.8	4.4	4.2				
7		自分の力で最後までやりとげ、達成感を味わい、自信をもつことができる。	3.0	4.2	4.2	3.8				
8		少し難しいことでも自分の力でやってみようと、誰かに聞いてみたり、自分なりに工夫したりする。	2.8	3.6	3.2	3.4				
9		自分の生活をより良くするために、行動することができる。	3.2	3.6	3.6	3.4				
10	言葉による豊かな伝え合い	家族や身の回りの人にあいさつをしたり、「ありがとう」を言ったりすることができる。	3.4	3.0	4.2	3.4	3.0	3.1	3.9	3.4
11		感じたり、考えたりしたことをいろいろな言葉を使って、相手にわかるように話すことができる。	2.8	3.8	4.0	3.2				
12		相手の言いたいことを理解しようと聞くことができる。	2.4	2.8	3.2	2.8				
13		経験したことについて話し合い、伝え合いを楽しもうとする。	3.2	2.8	4.2	4.2				

2回目事業後までのアンケート結果では、本事業を通して育みたい力「健康な心と体」「自立心」「言葉による豊かな伝え合い」の全ての観点で平均値が上昇した。

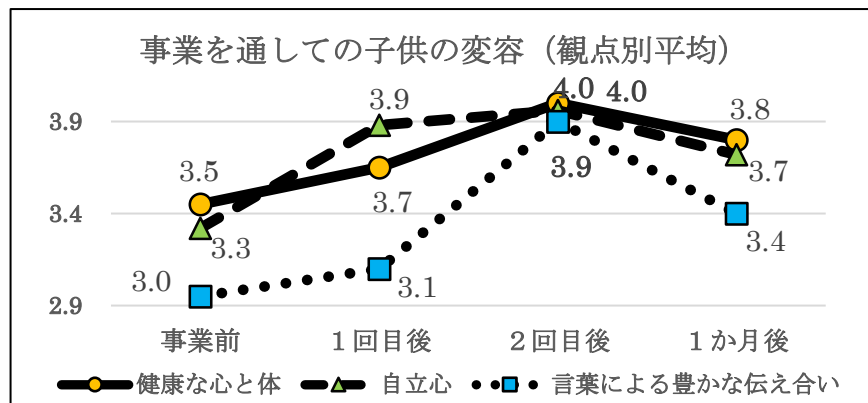
「健康な心と体」については、「いろいろな活動や遊びにおいて、自分なりの目標をもって取り組もうとする。」

「いろいろな活動や遊びにおいて、見通しをもって進んで取り組もうとする。」の項目が0.8ポイント上昇した。「親子で運動遊び」などの子供達がやってみたいと思う活動の設定により、進んで取り組もうとする姿が見られたと考えられる。また、「がんばったねカード」の取組により、目標を持って活動することにつながったと考えられる。

「自立心」については、「自分の力で最後までやりとげ、達成感を味わい、自信をもつことができる。」の項目が1.2ポイントと大きく上昇した。子供達がやってみたいと思うことに加え、がんばれば達成できそうな活動の設定や、余裕のある時間設定にすることで、子供達が最後までやり遂げ、達成感を味わうことができたのではないかと考えられる。また、事業の説明時に、子供との関わり方について保護者と共通理解を図ったことで、保護者が手を出し過ぎず、励ましの声かけをたくさんしていたことも大きな要因であると考えられる。

「言葉による豊かな伝え合い」については、「感じたり、考えたりしたことをいろいろな言葉を使って、相手にわかるように話すことができる。」の項目が1.2ポイント、「経験したことについて話し合い、伝え合いを楽しもうとする。」の項目が1.0ポイント上昇した。振り返り活動の設定や「活動中に使ってほしい言葉」の例示により、親子でのコミュニケーションが活性化したためと考えられる。また、保護者が子供達の思いをしっかりと聞くことで、子供達が伝えることの楽しさを感じ、より思いを伝えようとしたためと考えられる。

事業終了1か月後のアンケートでは、2回目事業終了後と比較するといずれの観点でも平均値が下がった。「自立心」については、事業中はがんばってしていたことも、日常生活に戻ったことで保護者に任せてしまうことが多くなったのではないかと考えられる。「言葉による豊かな伝え合い」については、時間的に余裕のあった事業での活動と比べ、日々の生活の中ではゆっくりと親子で対話する時間を持つことが難しいのではないかと考えられる。2回目事業後との比較では平均値が下がったが、事業前との比較ではいずれの観点でも平均値が上昇しており、本事業での成果があったと考える。



イ 自由記述

【2回目事業後】

- ・普段家の中で遊んでいるときにはできない深いコミュニケーションを子供とできたように思いました。
- ・絵も描き想像を膨らませてから集め、作るという流れで自然に子供が自主的に取り組みました。
- ・できるだけ自分でできるようにやってもらったらがんばってテントの設営や片付けをボランティアさんとやってくれた。
- ・なかなか夜のお散歩に連れ出す機会はないので、交流の家の敷地内で安心してハイキングができました。今まで見たことのない姿に驚きと喜びと…自分で行動することができました。

【事業終了1か月後】

- ・忙しい毎日の中で、少しでも運動や手伝いをする機会を意識し声かけをすると快く応じ、自分から「自転車降りて歩いて帰ろう。」「ランニング私も一緒に行きたい。」と言ってくれるようになりました。
- ・気持ちをしっかりと話せるようになりました。やる気にあふれる姿もあり、少し頼もしくなりました。
- ・夜、怖がらずに1人でトイレに行けるようになりました。事あるごとに、「交流の家に行ってきたから何でも1人で出来るよ!」と言うようになっています。

② ボランティアスタッフの見取り

今回の事業では、1家族につき1人のボランティアスタッフを配置し、本事業を通して育みたい3つの力について継続して見取りを行った。

ボランティアスタッフの自由記述より一部抜粋

- ・様々な運動遊びに積極的に楽しそうに取り組んでいた。
- ・好き嫌いはしていたが、残さずご飯を食べていた。
- ・森のレストランでは、自分らしさのある作品を作ろうと進んで木の枝や葉を拾う姿があった。
- ・保護者に甘えてしまう子が、砂像づくりで保護者から離れると、「がんばる。」と言って甘えずにがんばっていた。
- ・テント張りに子供がほぼ一人で全工程に取り組み、完成させていた。
- ・テントを作るとき、積極的に自分から作っていた。普段はさぼろうとすることが多いらしいので良かった。
- ・テントの片付けを率先して行っていた。
- ・テントの設営、片付け、荷物運びを自分でやりたいと言い、できていた。
- ・森の洋服づくりでは、作りながらどんどん新しい材料を取りに行き、考えていた。
- ・「ありがとう。」「手伝って。」「こうしてほしい。」など、自分の言葉でしっかりと伝えることがだんだんできるようになっていく姿が見られて良かった。
- ・普段内気で大人数のところだと控えめになるという子が、周りとは話しながら食事をしていた。
- ・森のレストランでは、みんなの前で何を作ったのかを最初は話すことができなかったが、話しかけ、少し待つことで自分の言葉で伝えることができた。
- ・森の洋服づくりで、できた服を見せ合いながらコミュニケーションを深めていた。

(3) 成果

- ・事業を通して育みたい力や「のとまり会で望む子供達の具体的な姿」について、保護者やボランティアスタッフと共通理解を図って子供達と関わったことで、子供達の変容した姿が多く見られ、アンケートでのポイントも上昇した。
- ・「がんばったねカード」を使うことにより、子供達が目標を持って活動し、自己評価することで、活動の意欲が高まり、積極的に活動する姿が見られた。
- ・事業全体を親子での活動としたことで、安心感を持って活動することができた。また、保護者が子供の変容をじっくり見取り、成長を感じることができた。講師の話や情報交換会から子育てについての情報を得ることができ、今後の子育てに活かしたいという保護者がいた。

(4) 課題

- ・安全管理の面から、子供同士が関わって活動することがあまりできなかった。相手の気持ちを考えて行動したり、分かりやすく伝えたりするなど、大人相手ではなく同年代の子供と関わることで成長の場面が設定できなかった。保護者からは、子供だけで宿泊する事業の希望が多くあり、子供同士が関わって成長する活動を考えていく必要がある。
- ・事業終了後に日常の生活に戻ってしまうと、できたことができなくなってしまうことが分かった。できたことが日常生活の中でも継続してできるように、子供達への情報の発信や、保護者への支援など、継続的な取組を考えていきたい。

令和2年度教育事業
「ボランティア養成事業兼自然体験活動指導者（NEALリーダー）養成事業」
～やる気！元気！ボランティア！～

1 趣旨

ボランティア活動に必要な知識や技能の向上を図り、ボランティアとしての資質を高め、広く社会でボランティア活動に取り組める青少年を育成するとともに、全国体験活動指導者認定委員会が制定した「自然体験活動指導者養成カリキュラム」に則り、子供の発達段階に応じて安全な活動を指導できる人材を養成する。

2 ねらい

ボランティア活動に必要な基本的な知識や技術を学ぶとともに、対象者理解を深め、適切な声掛けや支援が行えるようボランティアとしての基礎的な資質を養う。また先輩ボランティアが事業に参画することで、今後のボランティアネットワーク構築を図る。

3 日程

- (1) 期 日 令和2年9月20日（日）～9月22日（火・祝） 2泊3日
(2) 参加者 20名（大学生 19名、社会人 1名）
(3) 研修内容

1日目 (9/20)	○受付 13:30、開講式 14:00 ○「能登青少年交流の家って、どんなところ？」 ○「ボランティアってなあ～に？」 ○「安全に活動するために～救命救急法講習①～」 ○「心と体をほぐして仲間を作ろう♪」 ○「子供たちの前に立つ前に…心構えや倫理観」
2日目 (9/21)	○「自然体験活動の楽しさって？意義って？」 ○「体験でたくましい子供を育てる」 ○「子供たちを理解するために必要なこと」 ○「能登の活動を体験しよう♪野外炊飯編」 ○「能登の活動を体験しよう♪ナイトハイク編」
3日目 (9/22)	○「安全に活動するために～救命救急法講習②～」 ○「安全に活動するために～野外活動編～」 ○「広がれ！のとボラのWA！」 ○閉講式 15:00、解散 15:30

4 成果と課題

(1) アンケートによる事業評価

教育事業アンケートの満足度（「満足」と「やや満足」の評価割合）は、事業全体、事業運営、職員の指導・助言や対応の3項目において100%であった。

【事業全体の満足度】	満足：83.3%、やや満足：16.7%
【プログラム（講義・活動）の満足度】	満足：77.8%、やや満足：22.2%
【事業運営の満足度】	満足：88.9%、やや満足：11.1%
【職員の指導・助言・対応の満足度】	満足：88.9%、やや満足：11.1%

＜参加者の記述より＞（○：成果、●：課題）

- ボランティアを行う上での心構えや考え方を学ぶことができた。
- スタッフやサポートボラの方達がとても優しく接してくれた。
- 身近な自然物を使ったゲーム等、野外で実際に体験できたことが楽しかった。
- 休憩時間が少なく、スケジュールが詰まっているように感じた。

（2）成果と課題

① 成果

- ・本年度は広報として、大学へのチラシ配布は行わなかったが、関係教授や講師を通じてゼミ生等に声掛けを依頼した。また、当施設の他事業に参加していた金沢学院大学の学生や、これまで当施設でボランティア活動をしたことはあるが法人ボランティア登録をしていない学生に直接案内をした結果、20名程度の参加者を確保できた。
- ・サポートボランティア4名に事業運営に携わってもらうとともに、能登でのボランティア活動の紹介やボランティア活動を通して感じたことを話す時間を設けた。参加者にとっては経験者の生の声を聴く機会となり、サポートボランティアにとっては新たな人とのつながりの場となった。

② 課題

- ・連休中の開催であった為、昨年度より事業開始時間を早めたが、参加者から「もう少し時間にゆとりが欲しかった。」との意見もあり、今後も日程を検討する必要がある。その際、ボランティア養成事業と NEAL リーダー養成事業を分け、それぞれ1泊2日で実施することも検討したい。
- ・法人ボランティア制度の説明も含め、最終日にサポートボランティアの活動紹介等の時間を設けたが、講義の意図や内容もより深く理解したり、参加者同士のアイスブレイクの機会になったりすることを踏まえると、初日に設定すべきであった。
- ・本事業を受講した参加者が、継続して能登でのボランティア活動に関わってもらえるよう、事業案内等の情報発信をし、学んだことを実践できる機会やボランティア同士の交流の場を設ける必要がある。



【レクリエーション実技の様子】



【救命救急講習の様子】



【自然体験活動の実技の様子】

令和2年度 教育事業
教員免許状更新講習「教科指導・学級経営に生かす体験活動」

1 趣旨

教員が学習指導要領の改訂で示された児童生徒の「体験活動」の必要性について一層の理解を深めるとともに、活動プログラムの実習を通して「体験活動」の充実に資する。

2 ねらい

- (1) 学習指導要領で示されている体験活動の必要性について理解を深める。
- (2) 実習を行うことにより、体験活動の指導力を高める。
- (3) 体験活動を行う上でのリスクマネジメント、危機管理能力を高める。

3 日程

- (1) 期 日 令和2年8月19日（水）～21日（金） 2泊3日
- (2) 参加者 14名
- (3) 対象 小・中・高校免許状更新講習対象者

8月19日 （水）	午前	○受付 ○開講式：所長挨拶 ○講義「学習指導要領と体験活動」 講師：金沢星稜大学 教授 井上好人 ○演習「体験学習法の体験①」 講師：交流の家 次長 ・体験学習法とは・体験学習法エクササイズ他
	午後	○演習「体験学習法の体験②」 講師：交流の家 次長 ・体験学習法（新聞紙タワー、謎の宝島） ○講義「体験活動の教育的意義」 講師：金沢星稜大学 教授 池田幸應
8月20日 （木）	午前	○実習「体験活動の実際①」 講師：交流の家 企画指導専門職 ・火起こし体験・野外炊飯（カレーライス作り）
	午後	○実習「体験活動の実際②」 講師：交流の家 企画指導専門職 ・いかだ体験
8月21日 （金）	午前	○実習「体験活動の実際③」 講師：交流の家 企画指導専門職 ・ポイントオリエンテーリング
	午後	○講義「体験活動と安全管理」 講師：金沢星稜大学 准教授 芥川元喜 ○履修認定試験 ○閉講式 次長挨拶

4 成果と課題

(1) アンケートによる事業評価

教育事業アンケートの満足度（「満足」「やや満足」「やや不満」「不満」の評価割合）は、事業全体、プログラム、事業運営、職員の指導・助言や対応の4項目全てにおいて「満足」であった。

【事業全体の満足度】	満足：100%
【プログラム（講義・活動）の満足度】	満足：100%
【事業運営の満足度】	満足：100%
【職員の指導・助言・対応の満足度】	満足：100%

<参加者の記述より> (○：成果、●：課題)

講義・演習

- オンライン講座でも見やすく、内容が分かりやすく大変良かった。
- 学校現場を意識された内容が多く含まれており、たいへん分かりやすく、勉強になった。
- コロナ禍で仕方ない部分もあるが、講師の先生と直接話をしたかった。

体験活動

- 暑い中の活動だったが、健康面に配慮されて安全に実施することができた。
- 実際に子供たちが行う活動を体験できたことはとても大きい。下見等に来ても、コースを歩くだけ、見るだけになりがちだが、「グループの仲間と協力しながら活動することがこんなに楽しい」ということを、身をもって体験できた。
- 自然体験活動を多く体験することで、子供たちがどんなことを考えて行動するかということがより想像しやすくなった。これからも、子供たちの気持ちに寄り添って指導していきたい。
- 今回の体験活動では活動ごとに班のメンバーが変わり、それに伴い、班の雰囲気も変わった。子供たちの体験活動でも班の編成をしっかりと考え、多くの学びが生まれる集団になるように配慮が必要だと感じた。

その他

- 日程や時間に余裕があり、無理なく活動できた。
- 事業の広報時期はもう少し早いほうがよい。前年度の冬くらいがよい。

(2) 成果と課題

① 成果

- ・大学教授と交流の家職員それぞれの専門性を生かした講義・演習・実習を通して、自然体験活動の指導者としての必要な知識や技能を習得することができた。
- ・猛烈な暑さのために、屋外での活動中に参加者が熱中症にならないか心配したが、休憩時間を小まめにとり、水分補給を呼びかけることで安全に無理なく体験活動を行うことができた。
- ・いつもは指導する側の参加者が指導される立場（子供の立場）になることで、体験活動の重要性を認識するとともに、安全面での配慮を再確認することができた。

② 課題

- ・今回はコロナウイルス感染防止のため、大学教授の講座がオンラインでの配信となった。演習等がなく、一方的な講義になったため、物足りなさを感じた受講者もいた。
- ・体験活動の内容が数年変わっていない。現在実施している活動は全て教育効果が高いものであるが、新たなプログラムを検討していくことが必要である。



講義「学習指導要領と体験活動」



講義「体験活動の教育的意義」



講義「体験活動と安全管理」



演習「体験学習法の体験②」



演習「体験活動の実際①」火おこし体験



演習「体験活動の実際①」野外炊飯

令和2年度教育事業（ボランティア自主企画事業）
「のともキッズキャンプ」
～思いっきり遊びたい子 大集合！当たり前を発見する旅へ～

1 趣旨

【ボランティア】

事業を企画立案・運営することを通して、企画力・運営力・コミュニケーション能力を身につけるとともに、ボランティア同士の関わりからスキルアップ・意欲の向上・ネットワーク構築を図る。

【参加者】

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で様々な体験の機会が減少する中、工夫次第で自分たちでも「野外活動」や「イベント行事」を作り、体験できることを学ぶ機会とし、それらを通じて身近な人や物事への感謝の心や、新たな生活様式へ希望を持つきっかけとする。

2 ねらい

【ボランティア】

継続的なボランティア活動への参加の意欲を向上させ、後輩育成の視点も持ち合わせる資質を培い、自主的・協働的に判断や行動ができる人材を育成する。

【参加者】

身近な物や場所にも楽しめる要素があることを認識し、様々な活動を通して仲間と協力することの大切さ、楽しさを感じる。

3 日程

(1) 期 日 令和2年11月21日（土）～23日（月・祝） 2泊3日

(2) 参加者 ボランティア20名（企画7名、当日班付き13名）
子供34名 内訳 男子 小学5年生 9名 ・ 6年生 7名
女子 小学5年生 10名 ・ 6年生 8名

(3) 日程内容

	11月21日（土）	11月22日（日）	11月23日（祝・月）
午前		○お祭り屋台づくり	○野外炊飯（カートンドック） ○活動企画
午後	○開講式 ○仲間づくりゲーム ○オリエンテーリング	○お祭り屋台ブース体験	○ふりかえり ○閉講式
夜	○ナイトハイク	○キャンプファイア	

4 成果と課題

(1) 企画会議

新型コロナウイルス感染症防止対策を講じた上で、子供たちに外で遊ぶ機会や仲間と協力する機会をもたせたいという思いや、今までの生活を振り返り、身近な人や物事への感謝の気持ちやこれからの生活様式へ前向きな気持ちを育みたいという思いで事業目的を設定した。

キャンプ前日には、当日担当するボランティアと企画ボランティアが合流し、作った企画書を読み合わせながら、共通理解を図った。



【企画会議の様子】

(2) 活動の様子

お祭り屋台を作る活動では創意工夫し、仲間と協力をして自分たちの屋台を作り上げた。できた屋台を体験する時間では、お客としてくる他の班に対して、誇らしげに紹介する姿が見られた。また、最終日は2日間で体験し考えたことを踏まえ、各班でやってみたいことを企画・発表する時間を設けた。お互いの企画に「楽しそう」と感心し目を輝かせる姿が見られた。できなかったことも形を変えてできるようになることを知り、今後の生活に希望をもつきっかけとなった。



【屋台を体験する様子】

(3) アンケート結果

事業評価を目的とし、参加者を対象に調査を実施した。

キャンプは楽しかったですか？

とても楽しかった：26
楽しかった：7
あまり楽しくなかった：0
楽しくなかった：0

お兄さん、お姉さんはどうでしたか？

とてもよかった：29
よかった：4
あまりよくなかった：0
よくなかった：0

(4) 成果と課題

① 成果

【ボランティア】

- ・昨年度の反省も踏まえ、事業前日の全体ミーティングではボランティア同士のアイスブレイクを行い、企画ボランティアから事業のねらいや活動の詳細を共有する時間を設けた。その結果、当日担当のボランティアも参加者に対して、ねらいに沿った声掛けができていた。
- ・当施設以外の他施設ボランティアも参加したことで、お互いに新たな子供との関わり方や、事業の組み立て方を知ることになり「今後ボランティア活動をする上で、参考になった」との感想があった。

【参加者】

- ・今年はコロナの影響で体験できなかったことを自分たちで工夫し、作成・運営する活動を取り入れた結果、多くの参加者から「コロナで日頃できないお祭りや、野外活動ができて、楽しかった」との感想があった。また、実施した活動の多くに仲間と相談や協力する要素が含まれたことで、班の仲間と話し合う楽しさや、一から何かを作り上げた達成感を感じる機会となった。

② 課題

- ・刃物等の道具を使用する活動では、デモンストレーションを交えながら入念に指導、監視する必要がある。使用場所を制限する等、より多くのスタッフの目が届くよう対応を検討していきたい。
- ・事業が始まると、全体ミーティングは参加者の就寝指導後となる為、スタッフ内での悩みや考え等を共有する時間が限られる。ミーティングの内容や連絡事項を精査し、限られた時間に実施できるよう工夫する必要がある。

令和 2 年度 「地域の教育的課題に対応するプログラム」 推進事業
「NOTO キッズイングリッシュキャンプ」

1 趣旨

令和 2 年度から全面実施の学習指導要領では、小学校で英語授業が実施されている。これは急速なグローバル化に伴い、外国語によるコミュニケーション能力が様々な場面で必要となるからである。また、日本企業の人手不足に伴う外国人労働者の増加、外国人観光客の増加、海外市場への進出の加速化など、グローバル人材の育成・確保が進められている。このような社会情勢に対する試みとして、施設の特色や強みを活かしたプログラムを提供し、体験活動を通じた異文化理解や外国語への興味を推進していきたい。そのためにも、英語での体験活動を通して、その楽しさを感じるとともに、子供たちの頑張りを認めたり、仲間とのコミュニケーションを図ったりする機会を大切にしていきたい。

2 ねらい

仲間との英語を用いた体験活動を通して、楽しく音声や基本的な表現に慣れ親しんだり、他国の文化に触れたりする機会とする。また、安心できる温かい環境の中で、自分の考えや気持ちを英語で表現し、積極的にコミュニケーションを図る素地となる能力の育成を図る。これらのことが自信となり、日常生活において主体的に英語でコミュニケーションを図ることにつながることをねらいとする。

3 日程

(1) 期 日 【第 1 回】 令和 2 年 8 月 1 日（土）～2 日（日） 1 泊 2 日

【第 2 回】 令和 2 年 12 月 5 日（土）～6 日（日） 1 泊 2 日

(2) 参加者 【第 1 回】 小学校 5・6 年生 31 名

(5 年生：男子 8 名、女子 6 名 6 年生：男子 4 名、女子 13 名)

【第 2 回】 小学校 3・4 年生 28 名

(3 年生：男子 6 名、女子 9 名 4 年生：男子 9 名、女子 4 名)

(3) 研修内容

【第 1 回】	【第 2 回】
8 月 1 日（土）【館内泊】	12 月 5 日（土）【館内泊】
13:00 集合、受付	13:15 集合、受付
13:30 オープニング・仲間づくりの活動	13:45 オープニング・仲間づくりの活動
14:00 Activity①「イングリッシュオリエンテーリング」	14:30 Activity①「イングリッシュオリエンテーリング」
16:30 Activity②「世界の文化紹介」(説明)	17:00 イブニングタイム
17:00 オリエンテーション・ベッドメイキング	17:30 ベッドメイキング
17:50 夕食	18:00 夕食
18:50 Activity②「世界の文化紹介」(発表)	19:00 Activity②「クリスマス飾り作り」
20:30 入浴	20:30 入浴
21:10 振り返り	21:00 就寝準備
21:30 就寝	21:30 就寝
8 月 2 日（日）	12 月 6 日（日）
6:00 起床、清掃	6:00 起床、清掃
7:00 フレッシュタイム（ラジオ体操）	7:00 フレッシュタイム（ラジオ体操）
7:20 朝食	7:30 朝食
9:00 Activity③「ガパオライス作り」	9:00 Activity③「外国の遊びを楽しもう！」
13:00 Activity④「水引作り」	12:00 昼食
14:30 振り返り、クロージング	13:00 振り返り、クロージング
14:45 解散	13:30 解散

4 成果と課題

(1) 活動プログラムの実際

【第1回】	【第2回】
Activity①イングリッシュオリエンテーリング【聞く・話す】  地図とヒント写真をもとに館内及び敷地内20か所のチェックポイントを探し、チェックポイントにあるアルファベットを集める活動。また、「トークポイント」を数か所設定し、そこで一人ひとりが国際交流員との英会話をを行うという課題を設定した。	
Activity②世界の文化紹介【聞く・話す・書く】  英語での各国の紹介を聞き、日本の文化を英語で紹介する活動。	Activity②クリスマス飾り作り【異文化理解】  各国のクリスマスの過ごし方紹介とクリスマスリース・オーナメント作りのクラフト。
Activity③ガパオライス作り【異文化理解】  タイ料理「ガパオライス」作りを通して、外国の食を味わう活動。	Activity③外国の遊びを楽しもう！【異文化理解】  各国（アメリカ、韓国、スペイン）の伝統的な遊びを体験する活動。
Activity④水引作り【文化交流】  伝統工芸加賀水引作りを国際交流員と共に行い、文化交流する活動。	☆プログラム構成のポイント（各回共通） ○参加者と国際交流員（ブラジル、スペイン、アメリカ、韓国などから数名）が互に関わり合い、楽しく国際交流体験を行う。 ○英語の音声や表現に慣れ親しむ活動【聞く・話す・書く】と、外国の文化を五感で体験する活動【異文化理解】とを組み合わせる。

(2) 成果と課題

① 成果

- ・イングリッシュオリエンテーリングでは、1回目およびHAKUI キッズイングリッシュキャンプでの反省点を踏まえ、内容を改善した。実施・改善を繰り返すことで、より充実したプログラムにすることができた。
- ・イングリッシュオリエンテーリングのトークポイントでの会話では、聞き取りや質問への答え方に難しさを感じる子がいたが、グループ内で協力して課題を解決できたという体験により、楽しさ・うれしさ・自信につなげることができた。
- ・各活動において、参加者と国際交流員が関わるようなプログラムを企画したことで、参加者と国際交流員とのコミュニケーションを促進することができた。

② 課題

- ・参加者によって、「英語で話すのがうまくできなかった。」「少し難しかった。」と感じる子や、その一方で、「問題がすぐにとけた。簡単だった。」という子もいた。個々の英会話スキルが様々であることが要因となっていると思われる。今後、参加者のレベルに応じた対応もできるように国際交流員との調整を図っていくようにしたい。
- ・アンケート項目の「英語で行う活動は好きですか」で、「とても好き」「好き」が大半を占める一方、「あまり好きでない」と答えた参加者も少数いる。こうした英会話に苦手意識を持つ参加者へのサポート体制をしっかりと整えるとともに、英会話や国際交流が楽しいと思えるようなプログラムを今後も企画していきたい。

令和2年度教育事業 羽咋市教育委員会連携事業

「HAKU」キッズイングリッシュキャンプ」

1 趣旨

令和2年度から全面実施の学習指導要領では、小学校で英語授業が実施されている。これは急速なグローバル化に伴い、外国語によるコミュニケーション能力が様々な場面で必要となるからである。また、日本企業の人手不足に伴う外国人労働者の増加、外国人観光客の増加、海外市場への進出の加速化など、グローバル人材の育成・確保が進められている。このような社会情勢に対する試みとして、施設の特徴や強みを活かしたプログラムを提供し、体験活動を通じた異文化理解や外国語への興味を推進していきたい。そのためにも、英語での体験活動を通して、その楽しさを感じるとともに、子供たちの頑張りを認めたり、仲間とのコミュニケーションを図ったりする機会を大切にしていきたい。

2 ねらい

国際交流員、ボランティアスタッフ、仲間との交流を通じた体験活動を通して、英語による基本的な表現に慣れ親しみながら積極的にコミュニケーションを図る素地を養いたい。また、様々な国の文化紹介や国際交流員との触れ合いによる異文化理解を通して、グローバル意識を高めることにつなげていきたい。これらの体験が児童にとって、それぞれの活動のねらいに迫る達成感や満足感を味わうことに繋がり、何事にも前向きに考える児童の育成を図っていきたい。

3 日程・内容

(1) 期日・参加者等

期日	学校名	児童数	国際交流員等	ボランティアスタッフ
①9月10日(木)～11日(金)	瑞穂小学校5、6年	48名	5名	18名
②9月14日(月)～15日(火)	羽咋小学校6年	66名	6名	15名
③9月16日(水)～17日(木)	粟ノ保小学校5、6年 西北台小学校5、6年	54名	5名	10名
④9月17日(木)～18日(金)	羽咋小学校5年	54名	5名	10名
⑤9月29日(火)～30日(水)	邑知小学校5、6年 余喜小学校5、6年	67名	6名	9名

(2) 活動内容

1日目(日帰り)		2日目(日帰り)	
活動名	内容	活動名	内容
オープニング セレモニー	「Stand straight(気をつけ)」「bow(礼)」。司会の児童の英語で始まった。その後の所長の歓迎の言葉、代表児童の決意など、すべて英語を使って挨拶をした。	ガパオライス作り 【写真3】	異文化理解としてタイの郷土料理であるガパオライスを野外炊飯した。最初に食材や道具などの英語を確認し、料理方法は子供たちがボランティアに英語で「Please tell me how to cook～」と聞くように指示し、英語でのコミュニケーションを使う場を設けた。
イングリッシュ オリエンテー リング 【写真1】	基本的には説明は英語で行い、注意事項については日本語で行った。グループごとにボランティアスタッフが付き、安全指導や課題解決の手助けを行った。子供たちの課題は以下の3つである。 ・20枚の写真のポイントを探す(チェックポイント) ・5か所で国際交流員と英会話をを行う(トークポイント) ・7つのアルファベットを集め、並び替えて英単語をつくる	クロージング セレモニー 【写真4】	子供たち同士で2日間の振り返りを発表し合った。また、国際交流員からの感想を話してもらった。
世界の文化 紹介 【写真2】	最初の20分間は、国際交流員がそれぞれの自国の文化や名所をスクリーンに投影しながら英語で紹介した。その後、子供たちが国際交流員や仲間たちに日本の文化を英語で紹介した。発表会では、発表するグループと聞くグループを半分に分け、ポスターセッション形式で行った。	   	

(3) 事業の実施にあたって工夫したこと

<他団体との連携>

①羽咋市教育委員会

昨年度から連携協定を結んでおり、事業の内容等を年度初めから打ち合わせを行っている。また、市内小学校の実施日決定やALTの依頼などの協力をいただいた。

②近隣の大学

金沢学院大学、北陸大学、北陸学院大学の教員を通して、ボランティアスタッフの派遣を依頼した。各回9名以上の参加があり、「子供たちの傍に居てくれて安心だったし、学習の支援をしてくれて助かった」という小学校の先生方の意見が多かった。また、英語を学ぶ大学生が大半で、子供たちに積極的に英語で話しかけていた。

③小学校との打ち合わせ

7月末から8月末にかけて、各小学校の担当の先生方とプログラムの内容やタイムスケジュールなどについて打ち合わせを行った。各学校の実態や要望を聞きながら、活動プログラムを決めていった。

<新型コロナウイルス感染症対策>

- ・1泊2日のプログラムを日帰り2日のプログラムで実施した。
- ・グループ活動を5～6名程度にして、密接になる活動プログラムをできるだけ避けた。
- ・参加児童のマスク着用、手洗い、手指消毒等の徹底を行った。
- ・ボランティアスタッフに対して事前に行動履歴を調査し、毎朝検温を行った。

<他の教育施設の参考となる事例>

①使ってほしい表現 15【写真 5】

このキャンプの活動ごとに「使ってほしい表現 15」を決め、事前に子供たちに対して、発音の仕方を練習し、具体的な使い方・場面を指導した。子供たちはもちろん、指導者やボランティアスタッフも表現を意識しながら英語を使うことができた。また、「使ってほしい表現 15」を研修室に掲示したり、ワークシートに掲載したりして、子供たちが常に使えるように工夫した。

②タブレット端末の利用【写真 6】

英語活動において ICT 機器を効果的に活用するために各グループに1台ずつタブレット端末を貸し出した。世界の文化紹介では、発表するテーマの情報を集める子供たちが多かった。

③振り返りの場【写真 7】

活動の終わりには必ず振り返りの時間を設け、(1)自己評価を書く(ワークシート)(2)グループで意見を共有するという流れをつくることで、学びの定着を図ることができた。



【写真 5】



【写真 6】



【写真 7】

4 成果と課題

(1) アンケート結果より

① 参加者の評価(アンケートより)

本事業では国際交流に対する意識を調査するために、右図のような「外向き志向に関するアンケート」について全参加者を対象に実施した。参加者の意識の変容を確認するために、事業前・事業後の2回実施した。

事前と事後の比較をする際には、参加した児童の評価点をもとに、1要因被験者内分散分析を行った。結果については、【表 1】【グラフ 1】の通りである。

No.	質 問	とても 思う	少 し 思 う	あ ま り 思 わ な い	思 わ な い	ま う た く 思 わ な い	
1	英語（外国語）に興味がありますか	6	5	4	3	2	1
2	外国の文化に興味がありますか	6	5	4	3	2	1
3	日本の文化をさらに学びたいと思いますか	6	5	4	3	2	1
4	このキャンプを通して、外国語を使ったコミュニケーション能力を向上させたいと思 います	6	5	4	3	2	1
5	このキャンプを通して、集団生活における仲間とのコミュニケーション能力を向上 させたいと思えますか	6	5	4	3	2	1
6	このキャンプを通して、視野を広げたい（多くの考えを参考にしたい）と思いま すか？	6	5	4	3	2	1
7	日本人として世界の役に立ちたいと思いますか	6	5	4	3	2	1
8	これから交流する外国の人と将来、一緒に働いたり、交流したりしたいと思いますか	6	5	4	3	2	1
9	外国の人との交流を通して、自分の可能性を広げたい（自分をもっと高めたり、でき ることを増やしたりしたい、など）と思えますか	6	5	4	3	2	1

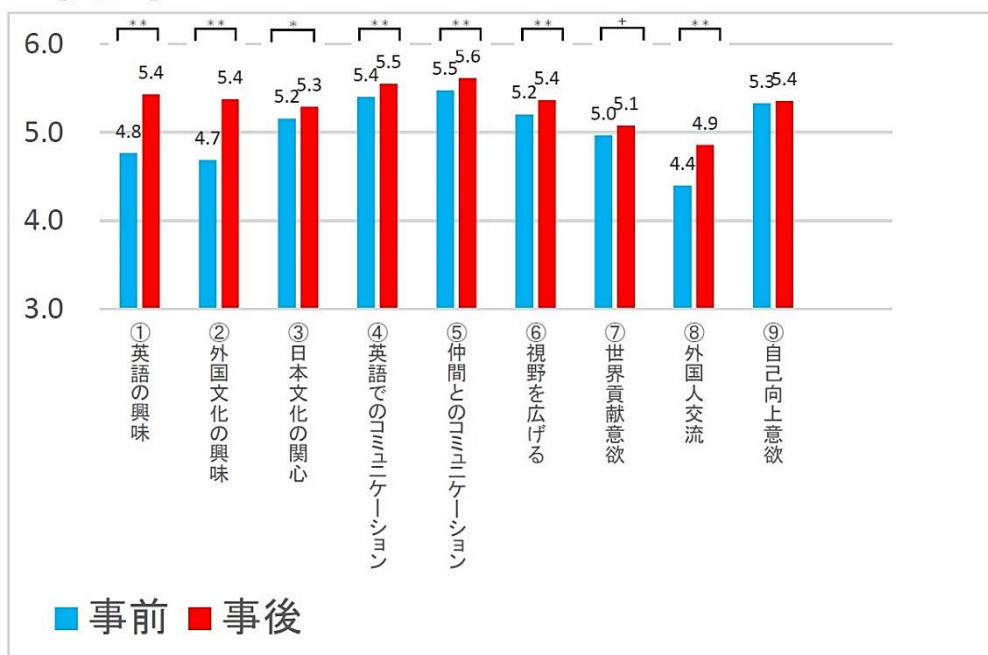
【表1】キャンプ前後の「外向き志向」に関するアンケート(羽咋市内小学校6校5、6年生)

1 要因被験者内分散分析(N=281)

	事業前		事業後		F	
	M	SD	M	SD		
①英語の興味	4.77	1.06	5.43	0.80	118.51	**
②外国文化の興味	4.69	1.17	5.37	0.80	118.04	**
③日本文化への関心	5.16	0.97	5.29	0.85	6.13	*
④英語のコミュニケーション能力の向上	5.40	0.92	5.55	0.75	9.36	**
⑤仲間とのコミュニケーション	5.47	0.85	5.61	0.73	8.17	**
⑥視野を広げる	5.20	0.96	5.36	0.82	8.71	**
⑦世界への貢献意欲	4.97	1.16	5.07	1.07	3.55	+
⑧外国人と交流することへの興味	4.40	1.33	4.86	1.11	51.53	**
⑨自己向上意欲	5.33	0.94	5.36	1.00	0.24	

+p<.10 *p<.05 **p<.01

【グラフ1】



1 要因被験者内分散分析から、事前から事後にかけて「外向き志向」における全ての項目において向上した。特に、①英語の興味、②外国文化の興味、④英語でのコミュニケーション、⑤仲間とのコミュニケーション、⑧外国人との交流の5項目において、1%水準の有意な差が認められた。

②、⑧については、本事業において母国が違う国際交流員がそれぞれの文化を紹介した「世界の文化紹介」やタイの郷土料理である「ガパオライス作り」を実施し、世界の文化に目を向ける活動を取り入れたことが、外国文化の興味を大きくした要因として考えられる。さらに、参加した国際交流員が親しみやすい雰囲気を醸し出し、子供たちに気軽に声をかけていたことが、子供たちの外国人に対する親近感を高めることに繋がったのだろう。

①、④、⑤については、「使ってほしい15の表現」を児童に提示し、英語を使う場面を意図的に設定したことで、英語によるコミュニケーションが増えたことが評価の向上に繋がったのだと考える。さらに、全てのプログラムがグループ単位で活動できるように設定し、それぞれの班にボランティアスタッフを付けて意図的にコミュニケーションを促進させたことが、英語でのコミュニケーションや仲間とのコミュニケーションを増やす要因となったと考える。

② 参加者の振り返りノートより

- ・ボランティアスタッフが使う英語が多くて、最初は何を言っているか分からなかったけれど、少しずつ分かるようになった。キャンプに来る前よりもたくさんの英語を使えるようになり、よかった。ボランティアスタッフは親切で親しみやすく楽しかった。
- ・このキャンプで自分はとても成長できたと思う。なぜなら、いろいろな英文を自分で作ることができたからだ。普段のカタカナ語をつなげるだけで簡単にできた。また、外国の人と触れ合うことができ、とてもよい経験になった。これを機に外国に行って暮らしてみたいと思った。
- ・このキャンプで分かったことは「まねをしたり、挑戦して話しかけたりするだけで、たくさんの英語を学ぶことができる」ということだ。少しずつ英語を使ってみると、だんだん自信がついて、たくさんの英語を話せるようになった。これからは挑戦する気持ちを大切にして英語に取り組みたい。
- ・キャンプを終えて英語はおもしろいと思った。理由は、世界の文化紹介の時に英語で発表することが楽しかったからだ。最初は難しいと思っていたけれど、やっていくうちに日本語を英語に変えることがだんだんおもしろくなった。初めてのキャンプで英語が好きになった。
- ・この2日間は英語に親しみをもてたし、楽しいキャンプで、英語を好きになれたと思う。ぼくの将来の夢は英語が必要なので、このように1日英語を使う日を作ってもいいと思った。
- ・2日目のガパオライス作りでは、タイの料理を初めて食べたけれどおいしかった。意外と簡単にできたので、家でも家族のために作りたいと思った。

③ 参加校の先生方からの意見

○ 成果

- ・イングリッシュオリエンテーリングや文化紹介を通して、英語でのコミュニケーション能力や文法の理解につながった。
- ・国際交流員、ボランティアの人数が多く、子どもたちが英語に関わる機会が多くあった。
- ・英語を話す、聞く、書く場面がはっきりと決められていたので、それぞれの場面で英語を意識して使うことができた。

○ 課題

- ・ボランティアスタッフの中にキャンプのねらいを把握していない人がいた。
- ・ガパオライス作りは、大変楽しく取り組むことができたが、安全上の指導などは日本語でする必要があり、また、調理ではあまり英語を使う必要感がなかった。
- ・国際交流員やALTの方と子どもたちが活動以外に関わる場面はあまり多くなかった。国際交流員の皆さんが手持無沙汰な様子が見られた。

(2) 成果

- ・ほとんどの児童が「外国の文化や英語の興味が高まった」と回答し、今回の活動プログラムは児童の英語に対する興味を高めるとともに、「外向き志向」を強めるためには有効であったと言える。
- ・活動場面ごとに「使ってほしい表現」を設定したり、グループで英文の発表をしたりして意図的に英語を話す機会を多く作ることで、英語でのコミュニケーションを増し、英語に親しむことができた。
- ・学習指導要領の目標にある「聞く」「読む」「話す」「書く」の4つの言語活動を活動プログラムに組み込み、学校での授業として位置づけたことで、教科（外国語科）に関連付けた体験活動を実施することができた。
- ・事業前と事業後に国際交流員やボランティアスタッフと打ち合わせをして意見を出し合ったことで、活動プログラムの改善を進めることができた。

(3) 課題

- ・新型コロナウイルス感染症拡大により、活動プログラムを急遽変更したり、感染症予防の対策をとったりして実施したが、今後も安心・安全に活動を進めるためにキャンプの内容や方法を吟味していく必要がある。
- ・学校との打ち合わせが十分でなかった。今後は、市内小学校のすべての担当者で内容を相談したり、学校の実態や特色を活かしたプログラムを考えたりするなど、早めに打ち合わせをして準備を進めていくことが必要である。

令和2年度教育事業 「ホップ・ステップ・Camp」

1 趣旨

森を舞台にした自然体験活動を通して、仲間と共に自然を楽しんだり、自然の中で生きる知恵を学んだりする機会とする。

2 ねらい

森を舞台に、野外活動の初歩的な内容を学ぶ自然体験活動を通して、自然の中で生きる知恵を学ぶとともに社会性や自立心の基礎を培う。

3 日程

(1) 期 日 令和2年10月24日(土)～25日(日) 1泊2日

(2) 参加者 小学校3・4年生 23名
(3年生：男子7名、女子8名 4年生：男子4名、女子4名)

(3) 研修内容

10月24日(土)【館内泊】	10月25日(日)
10:00 受付	6:00 起床
10:30 はじまりの会 ・仲間作りの活動・オリエンテーション	6:50 フレッシュタイム
12:00 昼食 食堂(バイキング)	7:20 朝食 食堂(バイキング)
13:00 活動① 「自分だけの隠れ家ティピーテント作り！」 (講堂) ・材料集め ・ティピーテント作り・飾り付け	9:00 活動③ 「たき火で暖まろう」 ・たき火の材料探し ・たき火に挑戦 ・たき火で簡単おやつ
17:00 ベッドメイキング	11:00 活動④ 「アツアツ!カートンドッグ作り」 (昼食)
18:00 夕食 食堂(バイキング)	13:00 終わりの会
19:00 入浴 浴室	13:30 解散
20:00 活動② 「手作りランプで明かりを灯そう」	
21:30 就寝	

4 成果と課題

(1) 活動プログラムの実際

本事業の対象としている小学校3・4年生は、野外活動への入門期として考えている。事業名を「ホップ・ステップ・Camp」としているように、野外活動の初歩的な内容を学ぶことができるプログラムを企画した。人間の生活に欠かせない要素として「衣・食・住」があるが、本事業ではその中でも「食」と「住」に焦点を当て、自然の中で「生きる知恵」を学ぶことができるよう活動プログラムを構成した。

活動① 自分だけの隠れ家ティピーテント作り！

本事業の中心的なプログラムである。ティピーテントは、アメリカのインディアンが利用する移動式住居の一種であり、骨組みとなる棒と布、ロープがあれば作ることができる。今回は、骨組み用の棒として竹を使ったが、森の中で木の枝等を調達して作ることも可能である。本事業では、一人用のティピーテントを各自が作成した。布にペイントを施したり、森で調達してきた葉や木の枝を麻ひもで括り付けるなどして飾りをつけたりして個性豊かなテントに仕上げた。



【ティピーテント作りの様子】

活動② 手作りランプで明かりを灯そう

夜の活動として、ランプ作りを行った。今回は、材料としてグラスとサラダ油、麻ひもを利用した。どれも身近にあるものである。普段電化製品に囲まれて生活しているが、こうした知恵があれば、野外活動時や停電時にも生かすことができるだろう。今回は、グラスにセロファンを巻いたり、マジックで模様を描いたりしてオリジナリティを出せるようにした。そして実際に真っ暗にした状態で、テント内に明かりを灯し、明かりや火の大切さや便利さを体験した。



【ランプを灯したテントで寛ぐ参加者】

活動③ たき火で暖まろう

子供たちは普段の生活の中で、火を扱う経験が少ない。マッチを使ったことがない子もいる。そこで、今回、たき火の材料となる枝や杉の葉などを森の中で集め、自分たちが調達してきたものを使ってたき火をする活動を計画した。たき付けには、麻ひもをほぐしたものを使用し、マッチを使って着火させた。また、そのたき火を使ってマシュマロを炙って食べることで、暖をとるだけでなく、調理など、様々な用途に活用できることを、体験を通して理解できるようにした。



【たき火の様子】

活動④ アツアツ！カートンドッグ作り

カートンドッグは、牛乳パックを燃料として利用して作るホットドッグである。非常によく燃える牛乳パックの特長を活かした調理方法であり、着火には、たき火を活用した。カートンドッグ作りの材料は、全て家庭で用意できるものばかりである。身近なものを使い、野外でも手軽かつ手早く調理ができる体験としてカートンドッグ作りを行った。



【カートンドッグを食べる参加者】

(2) 成果と課題

① 成果

- ・事業評価を目的として、参加者にアンケートを実施したところ、総合的な満足度は、「とても楽しかった」87%「楽しかった」13%となっており、肯定的評価が100%となった。アンケート自由記述欄において、全ての活動プログラムに対して「楽しかった」という肯定的な記述が見られ、子供の発達段階にあった内容であったと言える。
- ・時間的、内容的にもゆとりのあるプログラムを組んだことで、子供たちが自分の力でティピーテントやランプ作り、たき火等を行うことができ、一人ひとりの達成感につながった。



【ティピーテントのテント村】

② 課題

- ・当日は不安定な天候だったため、屋外で活動するか、屋内で活動するかの判断に迷う場面があった。悪天候だった場合の対応を、様々な気象条件を考えてシミュレーションしておくようにするとともに、時期的な気象条件も考慮し、天候によって大きく左右されないプログラムを企画することが大切である。
- ・たき火の活動で、当日風があり、火の粉が飛んで危険な場面があった。火傷やケガはなかったものの、今後も活動時における様々なリスクをスタッフ間でしっかりと共有し、対応できるようにしていきたい。

令和２年度 教育事業
 ヒノビィと一緒に 通学合宿
 ～仲間と一緒に生活習慣と学習習慣を身に付けよう～

1 趣旨

能登青少年交流の家での集団宿泊生活や生活体験活動を行いながら、普段の学校生活を送ることを通して、望ましい生活習慣や学習習慣を身に付けさせるとともに、社会性や協調性を育てる。

2 ねらい

- 規則正しい生活をするすることで、基本的な生活習慣を身に付けるとともに、学習習慣の定着を図る。
- 自分のことは自分で行うことで、自主性や自立心を育てる。
- きまりを守り、仲間を思いやりながら集団で生活することで、社会性や協調性を育てる。

3 後援・協力

羽咋市教育委員会
 宝達志水町教育委員会
 中能登町教育委員会
 志賀町教育委員会



4 対象

小学校 3～6 年児童

5 参加校・参加人数

No.	学校名	期間（2泊3日）	参加人数
1	羽咋市立栗ノ保小学校	10月26日（月）～28日（水）	24名
2	宝達志水町立相見小学校	10月28日（水）～30日（金）	28名
3	羽咋市立邑知小学校	11月11日（水）～13日（金）	48名
4	中能登町立鹿西小学校	11月16日（月）～18日（水）	7名
5	宝達志水町立宝達小学校	11月18日（水）～20日（金）	10名
6	羽咋市立余喜小学校	12月 2日（水）～ 4日（金）	13名
7	中能登町立鳥屋小学校	12月 7日（月）～ 9日（水）	22名
8	羽咋市立瑞穂小学校	12月 9日（水）～11日（金）	32名
9	羽咋市立西北台小学校	12月16日（水）～18日（金）	28名
10	志賀町立志賀小学校	1月18日（月）～20日（水）	22名
合計			234名

6 日程

第1日目		第2日目		第3日目	
		6:00	起床・身支度・清掃	6:00	起床・身支度・清掃
		6:50	朝食	6:50	朝食
		7:25	バスで登校	7:25	バスで登校
		8:00	学校生活	8:00	学校生活
17:45	受付				
18:00	出会いのつどい オリエンテーション	16:15	バスで下校	放課後	学校から帰宅
		17:00	学習等		
18:30	夕食	18:30	夕食		
19:00	学習（宿題・自学）等	19:00	学習・自由時間		
20:00	入浴	20:00	入浴		
21:00	翌日の準備	21:00	翌日の準備		
21:30	就寝	21:30	就寝		

7 活動内容

○学習の様子

下校後は、一人ひとりが学習に一生懸命取り組んだ。自分で課題を見つけて自主学習に取り組んだり、分からない問題をお互いに教え合ったりする姿が見られた。音読の宿題については、職員が聞き役となり、スラスラと大きな声で読んでいた。



○自由時間の様子

宿題が終わった後の自由時間は、部屋でおしゃべりをしたり、オセロ、卓球などをして仲良く過ごした。



○食事の様子

夕食・朝食は、食堂でのバイキング。好きな料理を選びながら盛り付ける楽しさもあり、毎回の食事をとても楽しみにしている。ほとんどの子供たちが「おいしい、おいしい」と言って、おかわりをしていた。



○宿舎での様子

宿舎では、協力しながらベッドメイキングを行い、夜はぐっすり寝たようだ。また、翌朝には部屋の隅々まで掃除をしたり、布団をきれいに畳んだり姿が見られた。「来た時よりも美しく」をしっかり実践している子供たちに職員一同は感心していた。



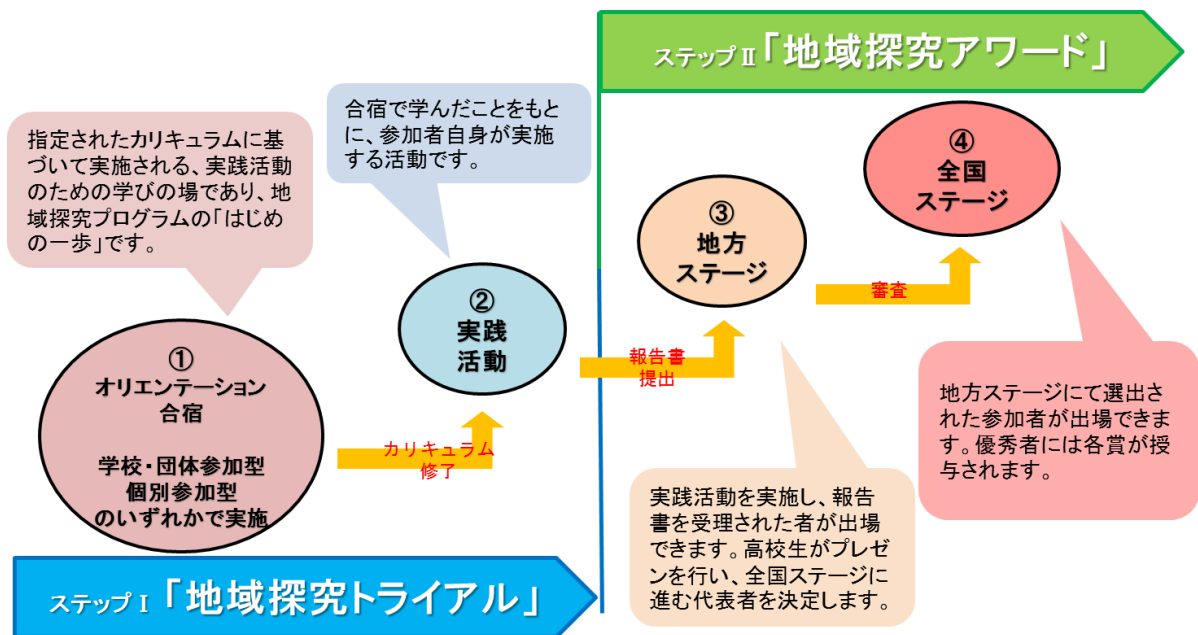
8 成果と課題

- ・ほとんどの子供たちが「楽しかった」「また来たい」と言っており、楽しい時間を過ごすことができたと思われる。今後は子供たちの声を聞きながら、さらに有意義な事業になるように活動内容等を工夫していきたい。
- ・なかなか眠れない子供もいた。体調を崩さないようにするために、健康状態等をしっかり把握し、必要に応じて保護者や学校に連絡する必要がある。

令和 2 年度教育事業
全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」
「オリエンテーション合宿 in 能登」

全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」とは

国立青少年教育振興機構が令和 2 年度に新設した「全国高校生体験活動顕彰制度『地域探究プログラム』」は、高校生の体験活動を通じた成長を目指し、改訂された学習指導要領のキーワードである「探究」の手法を用いて学習を深める制度である。取組みを段階的に分けており、ステップⅠ「地域探究トライアル」とステップⅡ「地域探究アワード」から構成している。「地域探究トライアル」では「探究」の学びと実践を、そして「地域探究アワード」では意欲の高い高校生向けに実践活動の顕彰を行う。



【図 1 地域探究プログラムの構成】

1 趣旨

高校生が地域づくりや地域の課題解決などに関する体験活動を通して、問題発見・解決能力を身に付け、新たな価値を創造する人材育成に資するとともに、それぞれの実践活動の成果や自身の成長を適切に評価し、青少年の体験活動に関する社会的な認知を高める。

2 ねらい

羽咋市内の地域づくりの実践家と地域の課題解決などに関する体験活動〔自然環境、商業、福祉の 3 コースから成るフィールドワーク（以下、「FW」とする。）〕を通して、ものごとを探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力などを身に付ける。

3 日程

- (1) 期 日 令和 2 年 6 月 9 日（火）、6 月 12 日（金）、6 月 16 日（火）、6 月 17 日（水）
- (2) 参加者 石川県立宝達高等学校 第 2 学年 39 名（男子 20 名 女子 19 名）

(3) 研修内容及び講師

① 研修内容（カリキュラム）

分野	No.	科 目 名	月/日	時間	探究のプロセス	主な活動内容	活動場所
導入	1	ガイダンス	6/9	14:40-15:30	—	地域探究プログラムの内容・スケジュール等の確認。	宝達高校
	2	講話 「地域づくりの実践」	6/12	14:40-15:40	—	「地域づくりの実践」の講話を聴き、今後の活動に向けて意欲を高める。	宝達高校
	3	FW① 「地域の魅力を発見」	6/16	9:10-13:00 昼食 / 休憩含む	—	羽咋市内での FW を通して、地域づくりに関する取組（自然環境、商業、福祉）についての活動を体験し、その魅力を発見する。	羽咋市内各FW先
	4	講義・演習① 「地域理解」	6/16	13:00-14:50	—	情報マップ作りを通して、FW①の調査内容の全体像を把握する。	交流の家
探究のプロセスの実践	5	講義・演習② 「課題解決の基礎」	6/16	15:00-16:50	課題の設定	FW 先の課題を明らかにし、その解決策や質問を考える。	交流の家
	6	FW② 「地域課題の探究」	6/17	9:10-11:00	情報の収集	FW 先の講師との意見交換を通して、より有効な解決策を考える。	羽咋市内各FW先
	7	講義・演習③ 「地域課題の探究」	6/17	11:10-14:50	整理・分析、まとめ	調査内容や課題の解決策をポスターに整理し、まとめる。	交流の家
	8	発表①	6/17	15:00-15:50	表現	作成したポスターを用いて、ポスターセッションを行う。	交流の家
地域課題の取組	9	講義・演習④ 「行動計画の基礎」	6月17日以降の高校の授業で実施		課題の設定	実践活動での行動計画を作成する。	宝達高校
	10	発表②			—	今後の実践活動の行動計画を発表する。	宝達高校
	11	実践活動のためのガイダンス			—	実践活動上の安全管理や社会のルール・マナーを理解する。	宝達高校

② 講師

[講話「地域づくりの実践」]

高野 誠鮮 氏(日蓮宗僧侶(妙法寺住職)総務省 地域力創造アドバイザー 新潟経営大学特別客員教授)

[FW①・②]

崎田 智之 氏(羽咋市 産業建設部 商工観光課 課長補佐

兼 6 次産業創生推進担当主幹 兼観光戦略推進担当主幹)

武藤 一樹 氏(自家焙煎珈琲店 神音 店主 株式会社神子の里 代表取締役社長)

森川 みなこ 氏(社会福祉法人弘和会 たきのーほーむ^{ふわり}風和里 羽咋事業部長兼管理者)

[ガイダンス、講義・演習①～③、発表①]

下澤 陽一(国立能登青少年交流の家 企画指導専門職)、他 国立能登青少年交流の家職員

③ FW 概要

ア 自然環境コース(講師:崎田氏、合同会社のとしし団)

今、能登半島では、爆発的にイノシシが増えている。これまでイノシシがいなかった能登では対策が遅れ、田畑に多くの被害が出ている。従来、捕獲されたイノシシは埋設処分されていた。これを資源として、精肉、革細工、肥料等に加工して活用する取組が「のとしし大作戦」である。この取組の立ち上げに関わった羽咋市役所の崎田氏と共に、イノシシの捕獲から、商品への加工・販売までの一連の流れを羽咋市内の各所を巡りながら学んだ。

【自然環境コース FW①の内容】

オリエンテーション(大研修室)(9:10-9:20)

合同会社のとしし団 見学(9:40-10:10)

神子原の棚田 見学(10:20-10:40)

道の駅のと千里浜 見学(11:00-11:30)

昼食(道の駅のと千里浜)(11:30-12:00)

※のとしし活用メニューの実食

質問タイム(12:20-12:40)



【のとしし大作戦】

イ 商業コース(講師:武藤氏)

神子原地区は、羽咋市内で最も高齢化・過疎化が進んでいる中山間地域である。講師である武藤氏は、岐阜県から神子原に移住し、自家焙煎珈琲店『神音』を開業。また、地域住民との協力により農産物直売所『神子の里』を設立し、現在は株式会社神子の里の代表取締役社長をしている。神子原の棚田や農産物直売所、カフェの見学やインタビューを通して、農産物の商品化やブランディングについて学んだ。

【商業コース FW①の内容】

神子の里見学(9:10-9:30)
神子原の棚田ウォーキングコース散策(9:30-10:30)
商品化の取組について(神子原公民館)(10:40-11:20)
自家焙煎珈琲店神音 見学・昼食(11:30-12:40)
※地元食材活用メニューの実食



【神子の里】

ウ 福祉コース（講師：森川氏）

たきの一ほ一む風和里は、小規模多機能型居宅介護施設である。
地域社会における高齢者福祉において、少子高齢化や認知症の方々の急激な増加に対し、地域で支え合う介護が課題となっている。この課題解決のため、地域に認知症介護について啓発し、地域の方々と認知症をキーワードとした地域コミュニティの構築に取り組んでいるのが、社会福祉法人弘和会であり、講師の森川氏である。森川氏と共に、利用者や地域住民との交流を通して、地域で支え合う介護について学んだ。

【福祉コース FW①の内容】

オリエンテーション(9:20～)
風和里の取組について(9:40～)
地域の高齢者の現状について(10:10～)
・千里浜地区生活支援協議体代表 富山一夫氏
・サロンおっちゃん家 参加の地域の高齢者 15 名
職員・利用者と共に昼食の準備(11:15～)
利用者と共に昼食(地域の郷土料理)(12:00～)



【たきの一ほ一む風和里】

4 成果と課題

本事業に参加した石川県立宝達高等学校第2学年の生徒から、今回のオリエンテーション合宿での学びについての振り返りをしてもらった。振り返りには、当施設が作成した振り返りシートを使用した。この振り返りシートの生徒の記述から、FWでの学びと成果と課題について以下にまとめた。

(1) FWでの学びについて（生徒の記述より一部抜粋）

① 自然環境コース

- ・イノシシを捕まえる難しさやイノシシによる畑の被害等の現状を知った。イノシシは集団で行動したり、頭が良かったりで捕まえるのがとても困難。いざというときは銃で倒さなければならないので、イノシシ肉は希少だと教わった。私は今回、イノシシ肉はのとしし団の活動と努力あつてのものだと学んだ。
- ・仕事に対するその人の意欲や努力がほんの少しだけ分かったような気がした。命を捧げたイノシシの肉を観光客だけでなく、地元の人たちにも食べてほしいと思った。イノシシに対する思いや、イノシシの頭のよさ、美味しさを学べた。



【田畑の現状見学の様子】

- ・のとしし団で働いている人たちの苦労や命を無駄にしないことの大切さを学んだ。なかなかマイナーで地元の人にあまり知られていないので、もっと地元の人や都会の人でも知っているような有名なイノシシ肉になってほしいと思った。

② 商業コース

- ・付加価値やPDCA サイクル、商品を続けて売れるようにすること、地元の特産物やそれを使った料理について知ることができた。
- ・神子原の素晴らしさを今まで知らずにいたけれど、棚田で一生懸命に米作りをする姿や棚田を守っていかうとする姿勢が、その現場に行くことによって感じる事ができた。
- ・私は、どんな所でも、その場所でもものすごく頑張っている人がいるのだなということを知ることができた。また、神子の里や神音カフェ、棚田で、様々な手段で神子原米を広めていくことや後継者問題を何とかしようとしていることが分かった。少しでも多くの人が神子原のことを知ってもらえるように、私たちが協力していけたらと思った。



【神子の里での見学の様子】

③ 福祉コース

- ・「福祉は幸せ」、「認知症は不便ではあるが不幸ではない」という二つの言葉が特に印象に残った。周りの関わり方を工夫することで、病の進行も緩やかにできるということを教わった。人を生かすだけでなく、幸せを守るのが福祉なのかと思った。
- ・認知症に関する情報を取り入れて、自分たちが認知症について理解することはとても大切なことだと学んだ。
- ・2日間の活動を行う前は、福祉に対して、「大変そう」「重労働だな」という偏見を持っていました。しかし今は、森川さんや森田さん、そして高齢者の方のお話を聞いて、福祉に対する偏見がなくなりました。活動の中で最も印象に残っている言葉は、「自分も周りの人も一緒に幸せになる」という言葉です。



【おっちゃん家での交流の様子】

(2) 生徒のオリエンテーション合宿の学びにおける成果と課題

① 成果

「オリエンテーション合宿を通して、自分ができたことは何ですか」という問いに対して、最も多く記述されていたものは、話し合いに関する内容である。これは、ブレインストーミングの手法を活用し、グループで意見を出し合いながら、情報マップを作成したり、FW 先の課題についての解決策を何度も話し合ったりしたことが影響してい



【グループワークの様子】

ると考えられる。

次いで多かったのが、発表に関することである。グループ内での発表、ポスターセッションでの発表等を行うことで、発表を行うことを段階的に繰り返してきたことによるものとする。

3 番目に多かったのが、課題解決に関することである。こちら、FW 先の課題を見つけ、その解決策を考えることができたと感じた生徒が多かった。協力に関すること同数であった。グループで活動したことにより、協力することの大切さを挙げる生徒が多かった。

② 課題

課題に挙げられたもののうち、最も多かったのが発表に関することである。発表の内容や話し方、姿勢、質問への対応等、発表の質に関する記述が多かった。発表の質を課題に感じ、より高めたいと考える生徒が多かったと考える。

次いで多かったものが、FW 先の取組の知名度と情報発信に関する内容である。それぞれの FW 先の課題として、情報発信をどうしていくか、社会的な認知度をどのように高めていくかということに課題を感じていることがわかる。他の内容が自分自身や自身の班に関する課題であるが、これだけが FW を通して学んだ地域活性化の取組における課題となっている。

3 番目に多かったものは、話し合いに関すること、情報収集に関することである。どちらも質的なものを課題として挙げているため、これも発表と同様に、質的な向上を意識している生徒が多くなったことがわかる。



【ポスターセッションの様子】

(3) 運営面における成果と課題

① 成果

- ・「生徒の学びが時間内である程度のレベルに達した。」「ポスターセッションでは、質問に答えることができる生徒が増えていて、成長を感じた。」という参加校教員の評価もあることから、オリエンテーション合宿が生徒の成長に結びついたと言える。
- ・4 日間の日帰り日程で実施することとなったが、参加校担当教諭との連携を密にしたことで、高校の意向に合わせた事業運営（講師、FW 先の選定、講義・演習のレベルの調整等）を行うことができ、生徒・教員の事業に対する満足度は 100% となった。

② 課題

- ・「FW に行く前に、見学先についてもう少し事前学習ができると、より良い」という教員からの意見があった。次年度は、事前学習についても高校側との打合せを行い、充実させていきたい。
- ・ポスター作りでは、時間が足りなかったという記述が見られた。また、他の項目の回答にも時間が短かったという記述が見られることから、活動内容に対して、配分された時間が短かったと考えられる。タイムマネジメントの意識をもって活動に取り組んでもらうという意図もあったが、今後宿泊を伴う日程での実施が可能であれば、各活動に十分な時間を配分できるようにしたい。

令和 2 年度教育事業
全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」
中 部 ブ ロ ッ ク 地 方 ス テ ー ジ
「 地 域 探 究 ア ワ ー ド i n 能 登 」

1 趣旨

高校生が地域づくりや地域の課題解決などに関する体験活動を通して、問題発見・解決能力を身に付け、新たな価値を創造する人材育成に資するとともに、それぞれの実践活動の成果や自身の成長を適切に評価し、青少年の体験活動に関する社会的な認知を高める。

2 ねらい

- ・各自が行った実践活動について発表するプレゼンテーション活動を通して、まとめる力や表現力を養うとともに、他者の発表や自身の発表への講評を聞くことで、新たな気づきや学びの機会とする。
- ・出場者が提出した報告書およびプレゼンテーションについて審査し、全国ステージに出場する代表者を選出する。

3 日程

(1) 期 日 令和 3 年 1 月 19 日 (火)

(2) 参加者 石川県立宝達高等学校 第 2 学年 39 名 (男子 20 名 女子 19 名)
参加者のうち、地方ステージ出場者は 4 グループ (16 名)

(3) 研修内容

① 日程

時 間	活 動 内 容	備 考
12:50	現地集合	
13:00～13:10	開会式・発表方法の説明	
13:10～13:45	プレゼンテーション審査①	1 グループ 15 分×2 名 (組)
13:55～14:30	プレゼンテーション審査②	1 グループ 15 分×2 名 (組)
14:30～15:10	審査員審議・振り返り	
15:10～15:40	結果発表・講評	
15:40～15:50	閉会式	
16:00	解散	

② 審査方法

書面審査 (審査会前) およびプレゼンテーション審査における得点を基に行う。

ア 書面審査 (事前に実施)

事前に提出された報告書に記載された内容を基に審査を行う。

グループ部門出場者については、グループ構成員個々人の得点をもとに算出した平均値をグループの得点とする。

イ プレゼンテーション審査

構成、表現力等に加え、質疑応答を含めて総合的に審査を行う。

グループ部門出場者については、全員で 1 発表として採点する。

③ 評価委員

立命館大学文学部	教授	本郷 真紹 氏（オンライン参加）
金沢星稜大学人間科学部	教授	池田 幸應 氏
石川県立鹿島少年自然の家	館長	藤澤 浩 氏
国立能登青少年交流の家	所長	佐藤 博之

4 成果と課題

(1) 実践活動から地方ステージまでの参加者の学びについて（参加者のアンケートより）

① 「実践活動」について

- ・今回の取組を通して、地域のことを深く知ることができた。
- ・自分達の考える問題についての専門家、体験者の方などに関わり視野が広がった。
- ・分からないことは分かるまで教えてくださり、プラスチックごみの現状や自分達ができることを考えることができた。

② 「実践活動報告書」作成について

- ・報告書を書くことは初めてなので、最初こそ戸惑ったが、学んだことも多かった。
- ・この取組で文章をまとめる力がついたのでよかった。
- ・今までの活動を振り返り、学んだことをまとめることができた。今後、自分の役に立つのではないかと考えられる良い機会だった。

③ 「地域探究アワード in 能登」について

- ・質問が思うより厳しく驚いた。自分たちの実力不足をひしひしと感じた。ためになる時間だと感じた。
- ・身近な問題から社会問題までたくさんのことを知ることができてとてもよかった。
- ・他のグループの発表を見て、聞き取りやすく、とても良いと思った。自分の発表も緊張したが、最後まで発表することができて良かった。
- ・評価委員の方々がいろいろ助言してくれてありがたかった。
- ・質問にしっかり答えられるようになっておきたい。



【発表の様子】

(2) 成果と課題（運営面）

① 成果

- ・現地集合とオンライン参加（一部の評価委員）を組み合わせることにより、コロナ禍においても予定通りに事業を実施することができた。
- ・各委員が全グループに対して講評を行う形をとり、参加者は各委員それぞれの視点からフィードバックを受けることができた。

② 課題

- ・緊急事態宣言発令下であったため、本部および評価委員をオンラインでつなぐ必要があった。オンライン審査を行う場合は、公平性を保つ観点から、地方ステージを実施する全施設で共通の機材を使う等の対応が必要。
- ・よりスムーズな運営を行うためには、オンラインで事業を実施する経験を積んでいくことが必要。

令和2年度 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業
「のともファミリーキャンプ（全3回）」

1 事業の概要

- (1) 趣 旨 家族で自然体験をすることを通して、親子の絆を深めるとともに、子供同士・親同士のつながりを生む機会とする。また、参加者が主体的に活動に取り組める工夫をし、キャンプ中に体験したことを私生活などに活かす一助とする。
- (2) 期 日 ①家族で野外活動&テント泊編 7月11日（土）～12日（日）【1泊2日】
②アウトドアクッキング編 10月17日（土）～18日（日）【1泊2日】
③国際理解編 11月28日（土）～29日（日）【1泊2日】
- (3) 参 加 者 ①10家族 32名
② 9家族 31名
③15家族 53名
- (4) 協力団体 ③NPO 法人 YOU-I
- (5) 内 容 ①家族で野外活動&テント泊編
・テント泊、ディスクゴルフ、砂像造り、アーチェリー
②アウトドアクッキング編
・野外炊飯（夕食、朝食、昼食）、ミニスウェーデントーチづくり
③国際理解編
・イングリッシュオリエンテーリング、世界の文化紹介、ガパオライス

2 事業の様子



【①アーチェリーを射る参加者】



【②スウェーデントーチを作る参加者】



【②鳥の丸焼きを作る参加者】



【③世界の文化を紹介する参加者】

令和２年度 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業
「能登オープンデー ー楽しもう！みんなの家でー」

1 事業の概要

- (1) 趣 旨 ・様々なブースでの体験を通して、自分の手で作る喜びや体を動かす楽しさなどを感じ、豊かな心情を育てる。
・「体験の風をおこそう運動」事業の一環として、体験活動への理解を深める。
- (2) 期 日 令和２年９月２６日（土）～２７日（日）
- (3) 参 加 者 29 家族 98 名
- (4) 協力団体 アウトドアチャレンジ協議会、バルーンのぶんちゃん、北陸モバイルプラネタリウム
- (5) 内 容 プラネタリウム、遊びりんピック、野外力検定、親子バルーン体験、クラフト体験、カヌー、アーチェリー、ディスクゴルフ

2 事業の様子



【アーチェリー体験】



【ハロウィンのバルーン作り】



【自然観察プログラム】



【安全に配慮した室内でのカヌー体験】

令和2年度 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業
羽咋市教育委員会連携事業
「プログラミング教室（初級編・中級編）」

1 事業の概要

- (1) 趣 旨 プログラムを考え、ロボットを動かしたり、ゲームを作ったりする体験を通して、自ら課題を発見し、解決するために必要な「思考力」「判断力」「表現力」などの能力や、主体性をもって仲間と協働しながら学ぶ姿勢を培う。
- (2) 期 日 ①初級編 10月 4日（日）【日帰り】
②中級編 12月13日（日）【日帰り】
- (3) 参 加 者 ①初級編 羽咋市内小学校3～6年生 23名
②中級編 羽咋市内小学校4～6年生 22名
- (4) 協力団体 株式会社PFU
- (5) 内 容 ①初級編
・身近にあるコンピューターとプログラミングの仕組みを学ぶ。
・プログラミングにより、ロボットを動かす。
②中級編
・身近にあるコンピューターとプログラミングの仕組みを学ぶ。
・プログラミングにより、オリジナルのゲームを作る。

2 事業の様子



【講師によるプログラミングの説明】



【オリジナルのゲームを作る参加者】



【初級編で動かしたロボット】



【オリジナルのゲームを披露し合う参加者】

令和2年度 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業
「のど'sキッチン（全2回）」

1 事業の概要

- (1) 趣 旨
- ・ 年中行事に関わる食文化を通して、季節を感じる。
 - ・ 調理を通して、初歩的な調理方法の技術を身に付け、メニューへの理解を深める。
 - ・ 家族での調理を通して、調理の楽しさの発見や協調性を養う。
- (2) 期 日 ①クリスマス編 12月20日（日） 【日帰り】
②バレンタイン編 2月11日（木・祝）【日帰り】
- (3) 参 加 者 ①クリスマス編 17家族50名
②バレンタイン編 13家族38名
- (4) 協力団体 なし
- (5) 内 容 ①クリスマス編
・ スコップケーキ作り
②バレンタイン編
・ 生チョコタルト作り

2 事業の様子



【スコップケーキの材料を切る参加者】



【完成したスコップケーキと参加者】

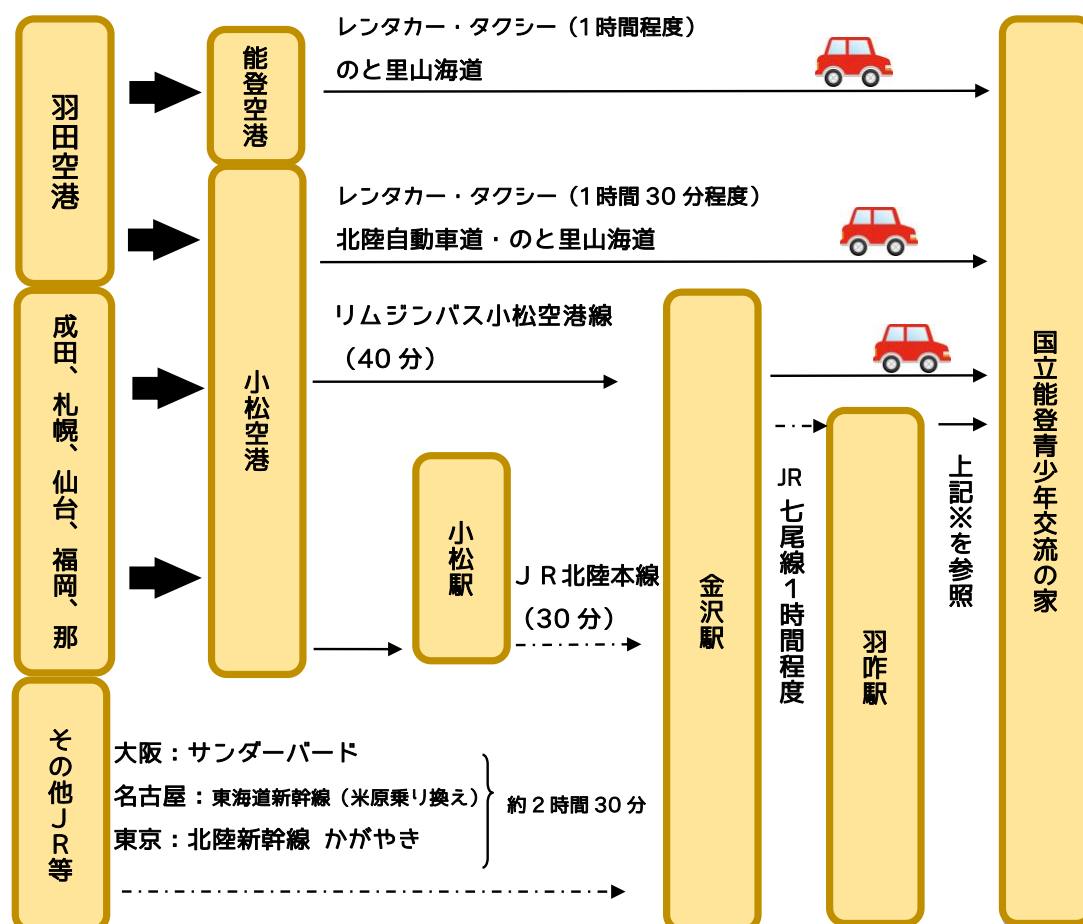


【生チョコタルトの飾りつけを行う参加者】



【完成した生チョコタルトと参加者】

交通アクセス



私たちは 国立能登青少年交流の家の活動を応援しています

令和２年度 協賛をいただいた皆様（敬称略 五十音順）

○大塚製薬株式会社

○株式会社コーシン

○西洋フード・コンパスグループ株式会社

令和２年度 国立能登青少年交流の家 職員

所長	佐藤 博之		
次長兼管理係長	田中 利弘		
主任企画指導専門職	堀田 俊宏		
企画指導専門職	下澤 陽一	関軒 友則	
事業推進係長	宮崎 一彰		
事業推進係	荒田 竜二	家市 佳澄	
	川上 元	社 太良	
	山岸 正樹	福田 靖	
	石黒 佳恵		
総務係長	小澤 浩二		
総務係	北川 輝		
管理係	谷野 美紅	荒水 久夫	
事業補佐員	安達 岩雄		



令和２年度 国立能登青少年交流の家事業報告書 *Do my best!*

■発行日 令和３年３月

■編集・発行者 独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立能登青少年交流の家

〒925-8530 石川県羽咋市柴垣町 14-5-6

TEL 0767-22-3121（代） FAX 0767-22-3125